

# 博 多 29

—— 博多遺跡群第53・67次発掘調査報告 ——

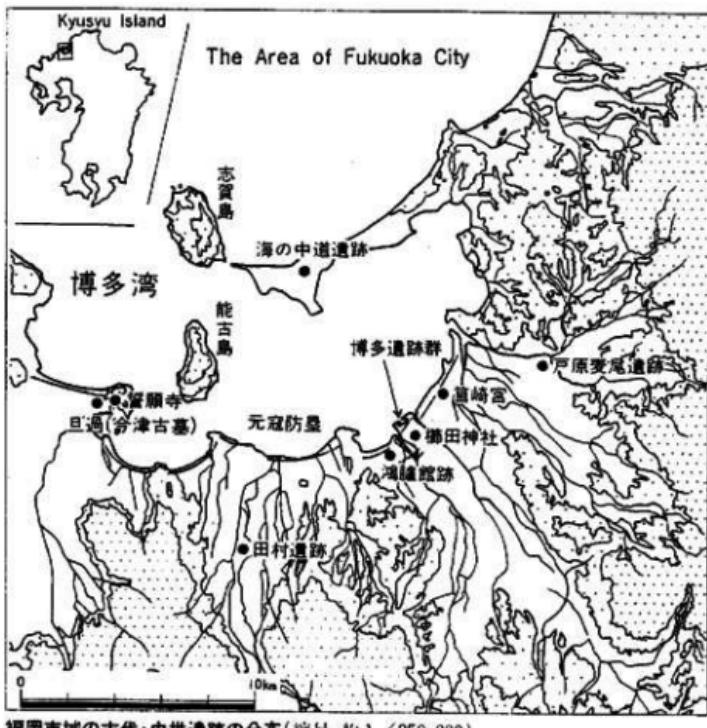
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第284集

1992

福岡市教育委員会

# 博多 29

—博多遺跡群第53・67次発掘調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第284集



1992

福岡市教育委員会

## 序 文

博多遺跡群は旧博多市街にあって、弥生時代以来現在に至るまで大陸文化流入の門戸として反映を極めた跡を残しています。

この博多遺跡群では、近年、都市化による再開発ビルなどの建設などにより急速に遺跡が失われる状況にあり、これまで80次をこえる記録保存のための発掘調査が行われてきました。

本書は、このうち第53・67次発掘調査の報告を収録したものです。

つきましては、本書が市民の皆様の文化財に対するご理解の一助となり、また、地方史研究の生資料として活用されることができれば幸いです。

また、発掘調査から整理・報告までの調査費用の負担、諸便宜をはかって戴いた株式会社九州石油九州支店、筑豊金網販売株式会社および窓口協議にたずさわって戴いた多くの方々のご協力に対して、心から感謝の意を表するものです。

平成4年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

## 例　　言

- 本書は、ガソリン・スタンド及び商業ビル建設に先立ち福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、博多遺跡群第53次(博多区中呉服町154ほか)および第67次(博多区冷泉町1-6)調査の調査報告書である。
- 本書の執筆・編集は、調査担当の常松幹雄と横山邦雄、古川千賀子で行った。
- 本書に使用した遺構実測図は、佐藤一郎・横山(第53次)、常松(第67次)が、遺物実測は横山、古川で行った。
- 本書に使用した遺構及び遺物写真は、担当分を横山、常松・古川がそれぞれ行った。
- 本書に使用した方位は、すべて磁北である。
- 遺構番号は、土壤、墓、溝(SK-、SX-、SD-)に区别し、それぞれに番号を付した。
- 遺物番号は、全遺構を通して登録し番号を付しており、掲載できたのはそのすべてではない。
- 本調査に関するすべての記録類・出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理される予定である。

遺跡調査番号	8930		遺跡略号	HKT-53	
調査地地籍	博多区中呉服町154他		分布地図番号	048-A-1	
開発面積	507.18m <sup>2</sup>	調査面積	190m <sup>2</sup>	調査担当者	佐藤一郎、横山邦雄
調査期間	1989年6月27日～7月5日		事前審査番号	63-2-550	

遺跡調査番号	9028		遺跡略号	HKT-67	
調査地地籍	博多区冷泉町1-6		分布地図番号	049-A-1	
開発面積	177.02m <sup>2</sup>	調査面積	210m <sup>2</sup>	調査担当者	常松幹雄
調査期間	1990年8月7日～9月1日		事前審査番号	1-2-295	

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 第53次調査地点.....	3
1. 調査概要.....	3
2. 検出遺構.....	4
①. 土壙.....	4
②. 溝.....	10
③. その他の遺構.....	11
3. 慢乱層出土の遺物.....	11
4. 遺構検出面出土の遺物.....	13
5. 小結.....	16
第3章 第67次調査地点.....	17
1. 調査概要.....	17
2. 検出した遺構について.....	18
①. SK .....	19
②. SX .....	37
③. SD .....	40
3. 遺構面出土の遺物.....	42
4. 小結.....	49

## 図版目次

PL. 1	1. 調査区南側作業風景（西から） 2. 調査区南側遺構完掘状況（西から）
PL. 2	1. 調査区南側遺構完掘状況（東から） 2. 調査区東側遺構完掘状況（南から）
PL. 3	1. SD01・02溝検出状況（西から） 2. SD03溝附近遺構完掘状況（北東から）
PL. 4	出土遺物

- PL. 5 1. 第67次調査発掘作業風景  
           2. 南側調査区遺構検出状況
- PL. 6 1. 第67次調査区上面全景(東より)  
           2. 第67次調査区下面全景(東より)
- PL. 7 第67次調査出土遺物(1)
- PL. 8 第67次調査出土遺物(2)

## 挿 図 目 次

Fig. 1	博多遺跡群位置図 (1/8,000) .....	2
Fig. 2	博多遺跡群第53次調査地点位置図 (1/400) .....	3
Fig. 3	博多遺跡群第53次調査区全休図 (1/150) .....	4
Fig. 4	SK01・02土壤出土状況実測図 (1/30) .....	5
Fig. 5	SK03・04土壤出土状況実測図 (1/30) .....	6
Fig. 6	SK05・06土壤出土状況実測図 (1/30) .....	7
Fig. 7	SK07・08土壤出土状況実測図 (1/30) .....	9
Fig. 8	SK02・04・05・06・07・09土壤出土土器実測図 (1/3, 1/4) .....	10
Fig. 9	SD01溝出土土器実測図 (1/3) .....	11
Fig.10	搅乱壙I・II・IV出土土器実測図 (1/3) .....	11
Fig.11	搅乱壙V出土土器実測図 (1/3, 1/4) .....	12
Fig.12	搅乱壙VI・VII・XI・XIII, XIV出土土器実測図 (1/3) .....	13
Fig.13	遺構検出面出土土器実測図(1) (1/3) .....	14
Fig.14	遺構検出面出土土器実測図(2) (1/4) .....	15
Fig.15	遺構検出面出土瓦拓影 (1/2) .....	15
Fig.16	博多遺跡群第67次調査地点の位置図 (1/600) .....	18
Fig.17	第67次調査区遺構配置図 (上面・上, 下面・下, 1/80) .....	(折込み)
Fig.18	SK01, 03土壤出土遺物実測図 (1/1, 1/3) .....	19
Fig.19	SK05土壤出土状況実測図 (1/40) .....	20
Fig.20	SK05土壤出土遺物実測図 (1/3) .....	21
Fig.21	SK06, 07, 08, 09土壤出土遺物実測図 (1/3) .....	22

Fig.22	SK10土壤出土状況実測図(1/40)	23
Fig.23	SK10土壤出土遺物実測図(1) (1/3)	24
Fig.24	SK10土壤出土遺物実測図(2) (1/3)	25
Fig.25	SK10土壤出土遺物実測図(3) (1/3)	26
Fig.26	SK10土壤出土遺物実測図(4) (1/3)	27
Fig.27	SK10土壤出土遺物実測図(5) (1/3)	28
Fig.28	SK10土壤出土遺物実測図(6) (1/3)	29
Fig.29	SK11, 16土壤出土状況実測図 (1/40)	30
Fig.30	SK12, 13土壤出土状況実測図 (1/40)	31
Fig.31	SK11, 12, 16出土遺物実測図 (1/1, 1/3)	31
Fig.32	SK14土壤出土状況実測図 (1/40)	32
Fig.33	SK14土壤出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	33
Fig.34	SK17, 18土壤出土遺物実測図 (1/3)	34
Fig.35	SK19, 20, 21土壤出土状況実測図 (1/40)	35
Fig.36	SK19, 20, 21土壤出土遺物実測図 (1/3)	36
Fig.37	SX01土壤出土状況実測図 (1/40)	37
Fig.38	SX01土壤出土遺物実測図(1) (1/3)	38
Fig.39	SX01土壤出土遺物実測図(2) (1/3)	39
Fig.40	SD01溝西壁土層断面実測図 (1/40)	40
Fig.41	SD01溝出土遺物実測図(1) (1/3)	41
Fig.42	SD01溝出土遺物実測図(2) (1/3)	42
Fig.43	遺構面出土の遺物(1) (1/3)	43
Fig.44	遺構面出土の遺物(2) (1/3)	44
Fig.45	西トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	45
Fig.46	東トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	46
Fig.47	包含層出土遺物実測図(1) (1/3)	47
Fig.48	包含層出土遺物実測図(2) (1/3) 37・38 (1/2)	48

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

博多第53次調査地点は、平成元年2月15日に九州石油株式会社福岡支店より博多区中呂服町154、155-2地内の給油所建替え計画が埋蔵文化財課に提出され、既施設の解体が終了した同年5月23日に試掘調査を実施した。

試掘では2本のトレンチを設定して遺構の検出にあたり、時期的に14~16世紀代の井戸・土壙墓などが現地下90~120cmで見付かった。その後調査成果をもとに本調査着手時期をはかるため工事工程ともあわせて協議を重ねた結果、同年6月27日より調査を実施することになった。

調査にあたっては原因者である九州石油福岡支店鬼丸氏とはじめ株式会社熊谷組福岡支店益田博・江藤文彦・株式会社建築設計事務所石橋正史、株式会社若杉建築設計事務所古川氏には諸々の窓口業務でお世話を頂いた。記して感謝する次第である。

また博多第67次調査は平成元年12月16日に博多区冷泉町1番6号地内のビル新築工事計画が出された。当該地は狭隘なうえに既設建物が未解体であったが、東側には隣接する博多第4次調査の成果から遺構のひろがりは予想可能であった。調査は工事工程の進行にあわせて行なうよう協議がなされ、平成2年8月7日より本調査にかかるよう合意された。

調査に際しては原因者である筑豊金網販売株式会社西島良助氏および株式会社鏡高組九州支店中村光喜氏には諸々のお世話をかけた。記して感謝する次第である。

## 2. 調査の組織

調査委託 九州石油株式会社九州支店（第53次）、筑豊金網販売株式会社（第67次）

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第2係

事務担当 課長 柳田純孝、第2係長 柳沢一男、松延好文・安倍徹（第53次）、中山昭則・松延好文（第67次）

調査担当 佐藤一郎・横山邦雄（第53次）、常松幹雄（第67次）

整理補助 小森恵和子・上妻崎つや子（第53次）、池田由美・衛藤美奈子・古川千賀子（第67次）

発掘調査 石川洋子 岩隈史郎 上野龍夫 大瀬良省吾 金澤春雄 川崎道子 久木田理  
窪田慧 熊本義徳 小城信子 権藤利雄 篠崎伝三郎 大長正弘 高波信夫  
徳永静雄 陳雅智 西本スミ 野口ミヨ 三宅悟 森垣隆視 森山恭助  
山崎光一 脇田栄

ボランティア 深野光康（福岡県立戸畠中央高校教諭）

第1章 はじめに



Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/8,000)

## 第2章 第53次調査

### 1. 調査の概要

当該調査区は、博多遺跡群を形成する二大砂丘の鞍部にあたる呉服町交差点の北東側250mの地点に位置する。本地区ではこれまでに調査例は多くなく、限られた範囲ではあったが中世末期の博多市街を考える上で成果があったと考えられる。

調査は前記のように平成元年5月23日に実施した試掘調査をもとに進められたが、試掘では既設石油タンクのあった西半部は埋設時の掘方によりGL下5m以上まで搅乱を受けており遺構は全て損なわれていた。

このために比較的構造物の無かった対象地の東辺および南辺で遺構の遺存が認められ、調査区はこの「L」字形の部分に限定して設定されることとなった。試掘時の検出遺構は東側トレチで14世紀代の土塙墓、南側トレチで近世井戸、礎石などがあるが、これらはGL下70~120cmにあり、海拔標高4~4.1mをはかる。

調査は、対象地の東・南辺の約190m<sup>2</sup>を発掘し、中世（14~16世紀）期の土塙5基、溝状遺構3条、土塙墓1基、ピット群及び近世の土塙13基、井戸2基などを検出した。

中世遺構は主に調査区東辺に多く、近世・現代の搅乱を受けていなければその密度はかなり濃いものであったと考えられる。調査区北端の溝2条（SD01・02）は東西方向を示し、道路側溝あるいは町屋区画の溝の可能性が高い。ピット群は西側を中心に径20~40cm程度のものが多く、中には平石を礎石にもつものもあるが、全体的なまとまりは把握できない。

また各遺構および検出面で出土した遺物類は土師皿を中心として国産瓦質上器、陶器および李朝陶器の三島手瓶や碗、明代青磁器など14世紀から16世紀と考えられるものがパンケース10箱分程出土した。

以下では個別遺構について説明を加えることとした。なお各遺構より出

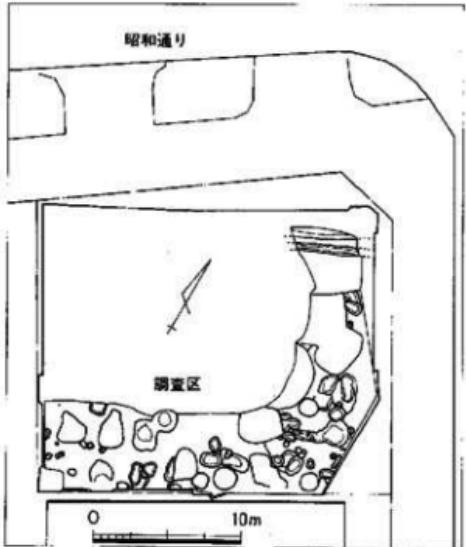


Fig. 2 博多遺跡群第53次調査地点位置図 (1/400)

上した遺物は全てを収録し得ず、各遺構の時期を示すと考えられるものに限定して載せた。

## 2. 検出遺構

### ①. 土壙 (Fig. 3 ~ 8)

土壙は試掘時に検出した土壙墓 (SK09) を加えて 9 基が確認される。また近世～近世遺構の土壙は搅乱壙として別に扱った。

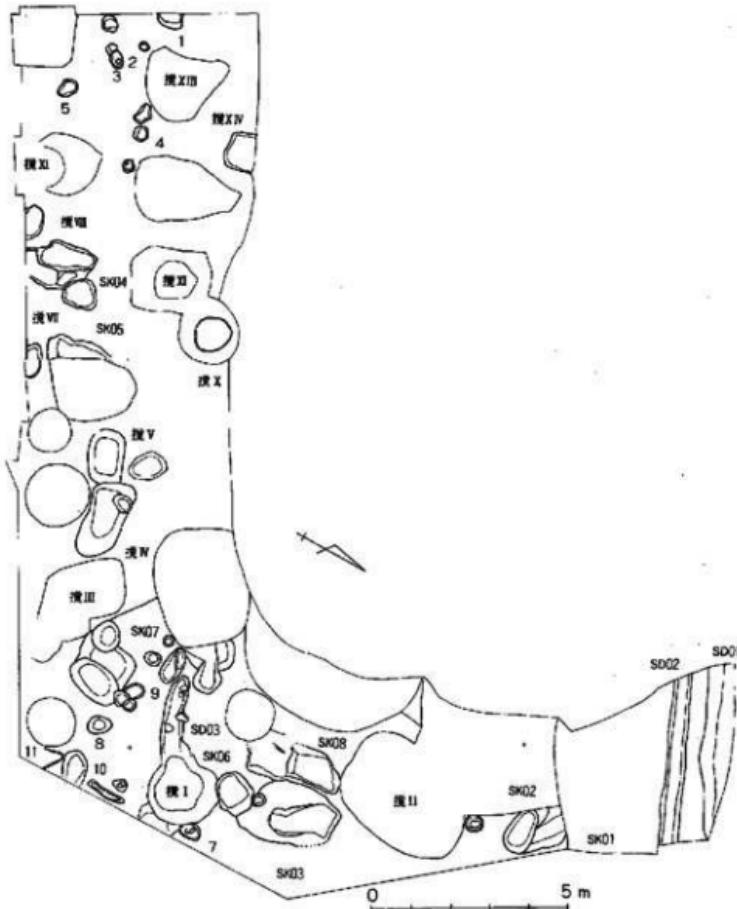


Fig. 3 博多遺跡群第53次調査区全体図 (1/150)

## SK01土壙 (Fig. 3・4・8)

調査区北東側に近く、SK02土壙に重複する。形状は不詳であるが、既存部から長方形の可能性がある。規模は短軸0.75m、深さ0.3mを残す。廃棄壙か。

出土遺物 (Fig. 8) 遺物は何れも土師器皿である。00003は口径7.6cm、底径5.4cm、器高1.6cmをはかり、器色淡褐色を呈する。底部糸切り離し。00004も皿である。口径12cm、底径9cm、器高2.9cmをはかり、器色暗褐色で底部に一部板目痕を残す。00005も口縁端をやや外側に引出す小皿で、口径7.4cm、底径5.5cm、器高1.3cmをはかる。器色暗褐色で、底部糸切り離し。

## SK02土壙 (Fig. 3・4・8)

調査区北側のSK01土壙と重複する。ほぼ東西に軸をとる長円形土壙である。規模は、長軸が1.1m、短軸0.65m、深さ0.28mを測る。廃棄壙か。埋土は黒色砂層で、遺物も殆ど出土していない。

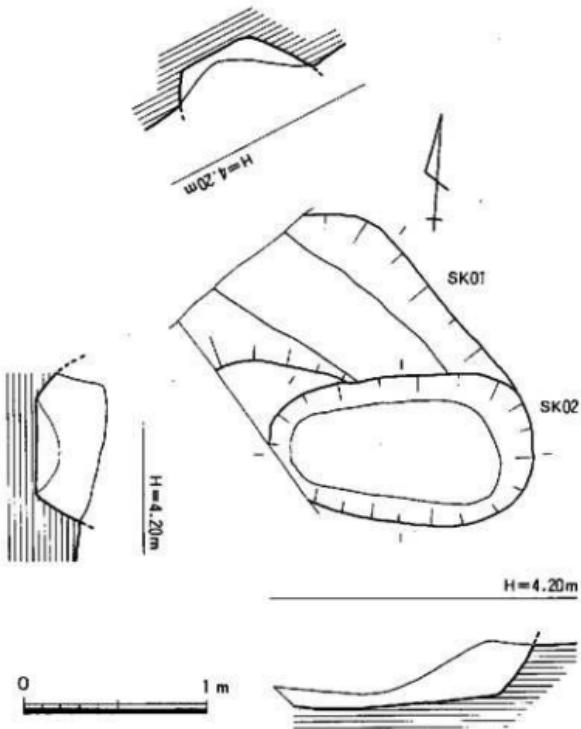


Fig. 4 SK01・02土壙出土状況実測図 (1/30)

## 出土遺物 (Fig. 8)

00006は弥生式上器壺頸部破片である。頸部に廻る突帯を残し、器色暗赤褐色を呈する。胎土に石英砂の混入多いが、焼成は堅緻である。後期初頭の所産か。

## SK03土壙 (Fig. 3・5・8)

調査区東辺部中間で検出された大型壙である。底部は二重壙の形状をなすが、埋土は黒色砂土で均質であり、複数の土壙の重複とは判断できなかった。形状は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸が2.5m、短軸1.5m、深さ

第2章 第53次調査

0.25mを測る。

廃棄塹か。

出土遺物

(Fig. 8)

00008は口縁部を失う土師皿である。底径5.4cmをはかり、推定口径11~12cmとなろう。底部端は磨滅が著しい。器色は暗褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。底部糸切り離し。

SK04土塙

(Fig.3-5・8)

調査区南西側にあり、近現代の多くの擾乱塙の影響を受けている。形状は不整な長方形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.75m、深さ0.33m程を測る。埋土はやや浅い褐色砂土である。廃棄塙か。

出土遺物

(Fig. 8)

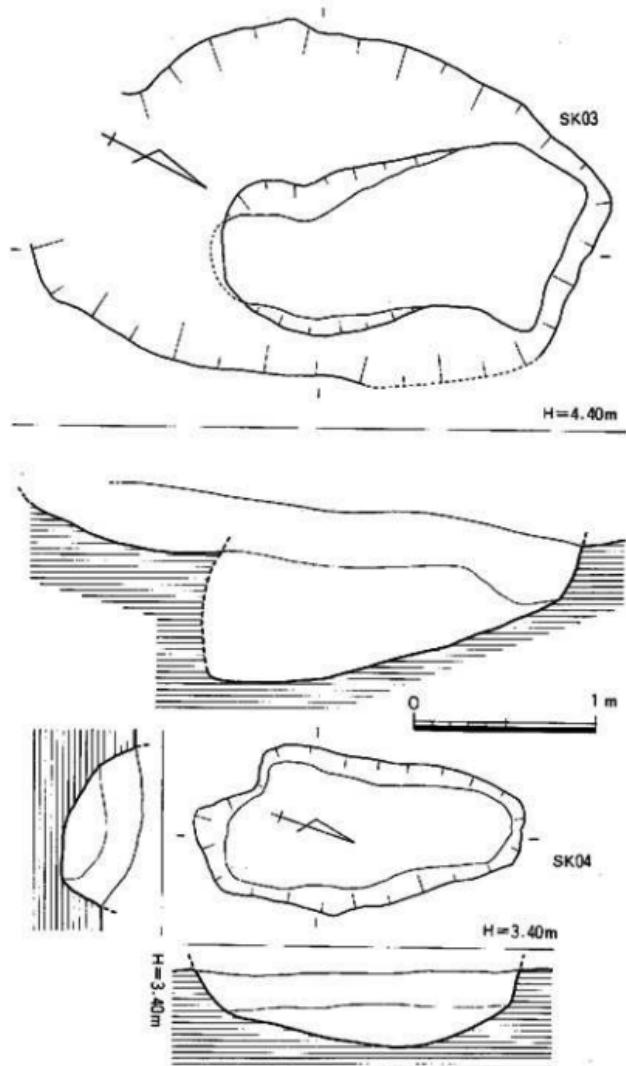


Fig. 5 SK03・04土塙出土状況実測図 (1/30)

00009・00011・00037とも土師器小皿である。00009は器色淡褐色を呈し、口径6.8cm、底径5cm、器高1.4cmを測る。胎土密。焼成堅緻である。00011も小皿である。口縁端をやや外方に引出す。器色は暗赤褐色を呈し、口径7cm、底径5cm、器高1.5cmを測る。胎土密。焼成堅緻である。00037は口径部の短い小皿である。大きさは口径7.3cm、底径5.3cm、器高1.2~1.4cmを測る。器色は淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。00010は、いわゆる高麗茶碗である。ややあげ底の底部から屈曲して外方に立あがる口縁を有する。釉は黄色味をおびた褐色を有し、内面の一部にはピンク色を呈する部分がある。外面口縁附近は刷毛目を施し、生地は淡褐色を呈する。また底部外面には細い水裂がみられ、内・外底には砂目跡が残る。口径13.4cm、底径4.4cm、器高5cmをはかる。本手ととや相当か。

#### SK05土壤 (Fig. 3・6・8)

調査区南西側にあり、SK04土壤の東側に隣接する小土壤である。形状は長円形を呈する。規模は長軸長が0.85m、短軸長0.7m、深さ0.22mを残す。埋土は淡褐色を呈し、遺物の出土量はきわめて少ない。

出土遺物 (Fig. 8) 00017は高台付小碗か。体部外面に褐色味をおびた淡灰色釉を掛けた。内面には厚く、外面下端部以下は露胎となり淡赤褐色を呈する。口縁は端部を擴く引出している。口径10cm。李朝磁器か。

#### SK06土壤 (Fig. 3・6・8)

本土壤は調査区東辺の南側に位置し、SK03土壤と重複している。形状は隅丸長方形を呈する。規模は長軸長1.1m、短軸長1m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色砂上で、遺物の出土量は極めて少ない。廐棄壤か。

出土遺物 (Fig. 8) 00013は摺鉢か。瓦質で径の大きい底部から直線的に外方に開く口縁の端部は内外に突出する。外面は全て厚くススが付着し、口縁下にナデ痕がのこる。また口縁端より1/3程のところまで細かい横ハケ目が残る。これ以下は使用時の回転によるものか器壁が凹面となり窪み、5本単位の荒い櫛描文が残る。さらに外底部は使用による磨滅が著しい。口径34cm、底径15.6cm、器高12.5cmをはかる。器色は内面淡赤褐色を呈し、胎土は密で一部に石英

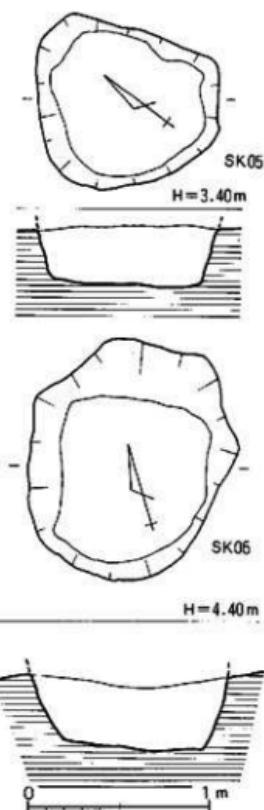


Fig. 6 SK05・06土壤出土状況実測図  
(1/30)

## 第2章 第53次調査

粗砂を含む。また焼成は非常に堅密である。

### SK07土壙 (Fig. 3・7・8)

本土壙は調査区東辺南端近くで検出された。土壙は搅乱によって十分に形状を窺えないが、ほぼ隅丸長方形と考えられる。長軸長は1.5m、短軸長0.7m以上、深さ0.24m程残っている。埋土は淡褐色砂土である。廐棄壙か。

出土遺物 (Fig. 8) 00014は土師器小皿である。口縁部立あがりが小さく、口径6.6cm、底径5.7cm、器高1.1~1.2cmを測る。器色は暗褐色を呈し、胎土密、焼成堅密である。

### SK08土壙 (Fig. 3・7)

本土壙は調査区東辺の北側に位置し、SK03土壙の西側に隣接する。南側で別の搅乱と重複している。形状は不整な隅丸長方形を呈し、長軸長1.1m以上、短軸長0.8m、深さ0.12m以上を測る。埋土は淡褐色砂土であるが、時期を特徴的に示す遺物は出土しなかった。

### SK09土壙 (Fig. 8)

試掘時に検出した土壙墓である。検出位置は調査区東辺に平行するトレンチの中間地点 (SK03上塙付近) にある。方位はほぼ東西に長軸線をとり、GL下70cm程で検出された。土壙墓の形状は明らかな長方形を呈し、東小口部では幅0.85m、長軸長0.8m以上、深さ0.15m以上の規模を残す。埋葬位置は頭部が東側と考えられ、土師皿一枚とともに頭頂部に近い頭骸片が残存していた。本調査では遺構検出時に遊離した人骨片がかなりまとまって出土したことから、中世期の墳墓地が周辺一帯に拡がっていた可能性も高い。

出土遺物 (Fig. 8) 00015は土壙墓頭辺に副葬されたものである。全体に器歿が均一で、底部付近はつよいナデ調整によって器壁が不安定となる。器色は内外面ともに赤褐色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅密である。器は口径12cm、底径7.6cm、器高2.9cmをはかる。14世紀の所産であろう。

### ②. 溝 (Fig. 3・9)

土壙番号	形 状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	時 期
SK-01	不明	—	0.75	0.3	土師器皿など	不詳
SK-02	長円形	1.1	0.65	0.28	遺物なし	中世末
SK-03	隅丸長方形	2.5	1.5	0.25	土師器皿など	中世末
SK-04	隅丸長方形	1.2	0.75	0.33	土師器皿・手製陶器など	中世末
SK-05	長円形	0.85	0.7	0.22	李朝磁器か	中世末
SK-06	隅丸長方形	1.1	1.0	0.3	国産土器か	中世末
SK-07	隅丸長方形	1.5	0.7以上	0.24	土師器皿など	中世末
SK-08	隅丸長方形か	1.1以上	0.8	0.12	遺物なし	中世末

検出遺構

溝遺構は調査区北端部の平行する東西溝2条およびこれより約13m程南にほぼ平行する溝1条の計3条である。

SD01溝 (Fig. 3 - 9)

調査区北端部にあり、方位をN-65°-Eにとる。南側縁線4.5m延長が知られる。幅員は0.8m以上、深さ0.2m以上と考えられる。埋土は黒色砂質土であり、遺物の出土は少ない。

出土遺物 (Fig. 9) 00001は非常に器壁の厚い壺形土器である。口縁端部がやや外方にひら

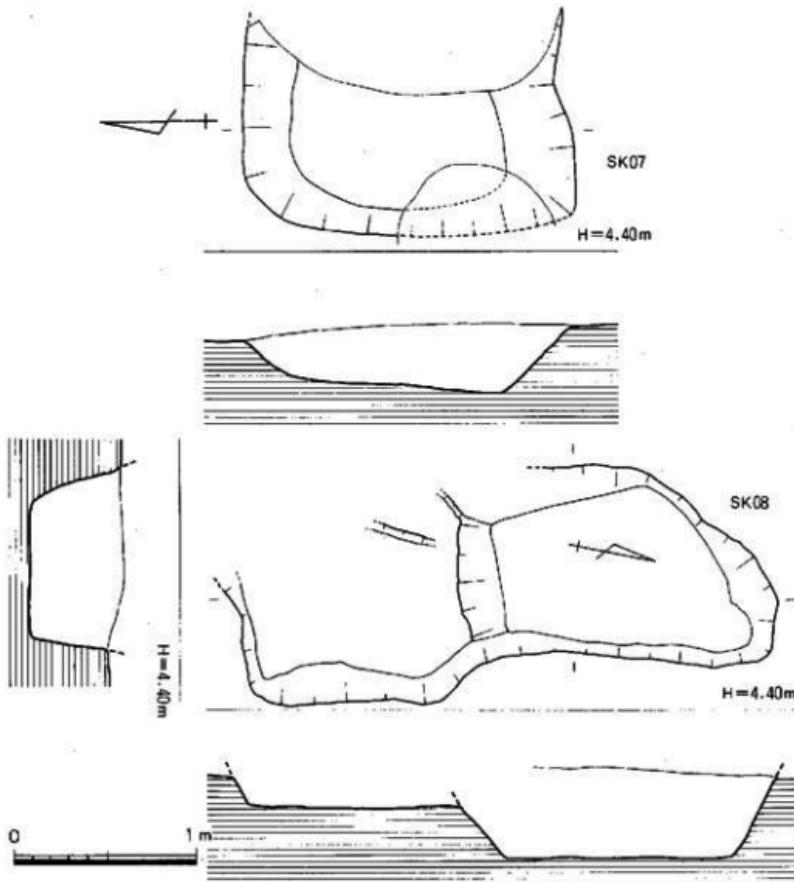


Fig. 7 SK07・08土壤出土状況実測図 (1/30)

第2章 第53次調査

く。調整は内面一部に横ナデを施すほかは全て横方向の細かいヘラミガキを行う。口縁下外面に黒色の固着物がみられる。器色は暗赤褐色を呈し、胎土に石英粗砂の混入多し。焼成堅緻。口径19.8cm。中国陶器か。00002は青磁器碗である。内外面ともに淡緑色釉をあつく掛ける。外底部のみ露胎となり、セピア色を呈する。内面見込みとの境に一条沈線を施す。底径5.4cm。明代の所産か。

SD02溝 (Fig. 3・9)

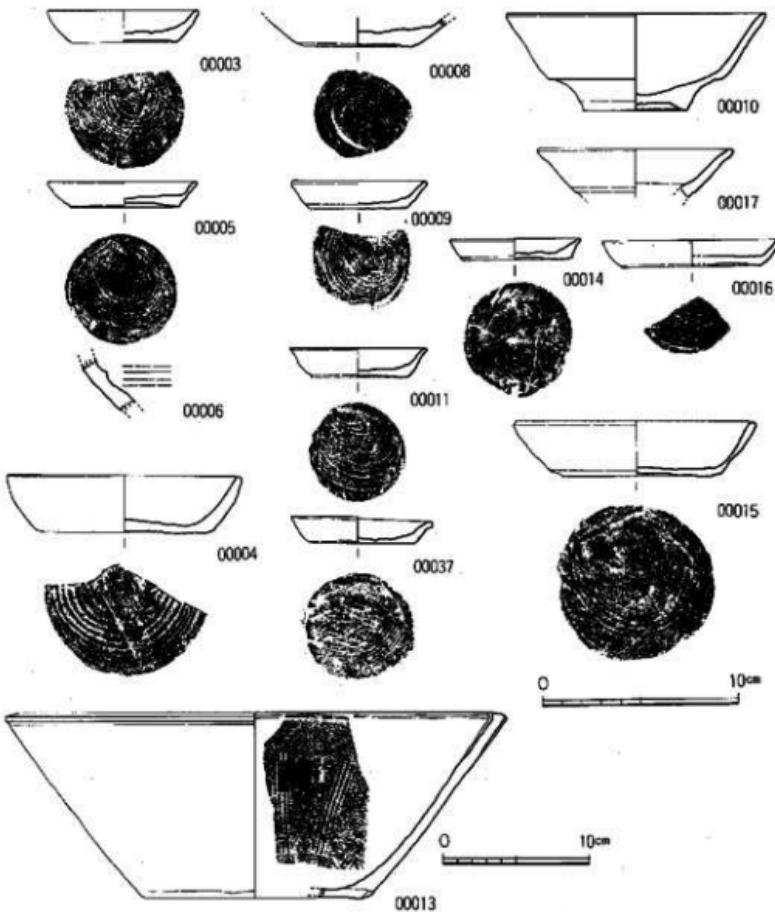


Fig. 8 SK02・04・05・06・07・09土壤出土土器実測図 (1/3, 1/4)

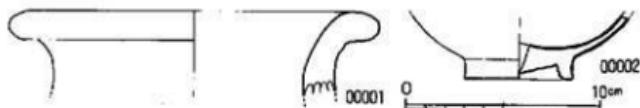


Fig. 9 SD01溝出土土器実測図 (1/3)

SD01溝の南側に平行する溝で、幅0.5m、東西延長4.5m以上、深さ0.3m以上を測る。周辺建物の状況が不明であるが、側溝或は町割に沿った溝の可能性もある。埋土は黒色砂質土である。

### SD03溝 (Fig. 3)

SD02溝南側13mに平行して走っている。幅員0.6m、延長2m以上、深さ0.1mが測れる。埋土は黒色砂上で、底部には破砕砾が数点みられる。

### ③. その他の遺構 (Fig. 3・8)

その他ではピット群11個がある。調査区南辺の西端 (SP01~06) と東端 (SP07~11) に残る。径は30~50cmの規模でSP03・07・08などでは底部に板状の平石を敷いており、明らかに柱穴のものもみられる。

出土遺物 (Fig. 8) 00016はSP07で出土した。全体に薄づくりで、器色は淡赤褐色を呈している。胎土は非常に密で、焼成は堅緻である。口径9cm、底径7.2cm、器高1.4cmをはかる土師器皿である。

## 3. 搅乱壙出土の遺物 (Fig. 3・10~13)

搅乱壙としたものは調査区南辺を中心として13基あり、主に近世のものである。このうち搅乱壙X・IIは瓦使用の円形井戸で、主に掘方内から出土した。また他には廃棄壙と考えられる。

搅乱壙I出土遺物 (Fig.10) 00018は手平把手である。内外面ともに黒色を呈し、横ナデ調

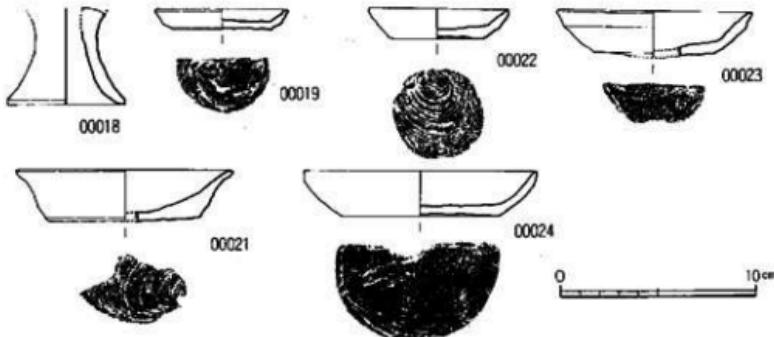


Fig. 10 搅乱壙 I・II・IV出土土器実測図 (1/3)

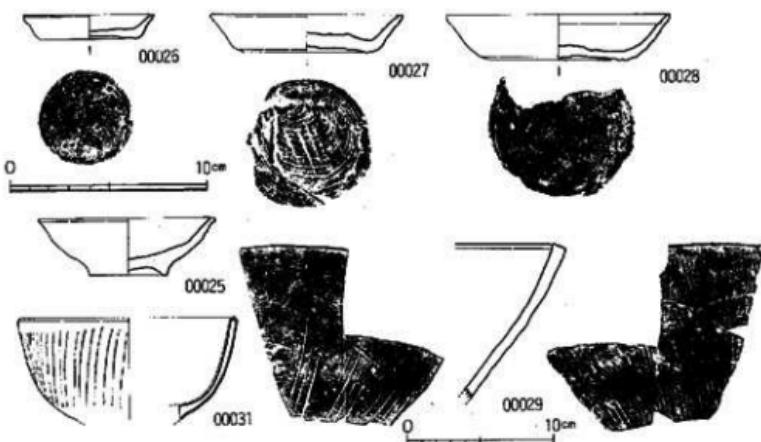


Fig. 11 摂乱塙V出土土器実測図 (1/3, 1/4)

整を施す。把手径6cm、00019は低い口縁が膨らみながら立ちあがる土師皿で、口径6.8cm、底径5.1cm、器高1cmを測る。器色は赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。

摂乱塙III (Fig. 3・10) 3点とも土師皿である。00022は内傾気味に立あがり、口縁端部が尖る。器色は暗褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径は7.25cm、底径4.7cm、器高1.5cmを測る。00023はやや大型の土師皿で、口径10cm、底径6.4cm、器高5.2cmを測り、底部は不安定である。器色は暗褐色を呈し、胎土密、焼成非常に緻密である。

摂乱塙IV出土遺物 (Fig. 3・10) 00024は土師皿である。内湾気味に立あがり、直口する口縁となる。内外面ともに横ナデで、内底部にナデを残す。器色は赤褐色を呈し、胎土に石英砂混入多し。焼成堅緻。口径12cm、底径8cm、器高2.4cmを測る。

摂乱塙V出土遺物 (Fig. 8・3・11・13) 7点掲載した。00026は小皿である。器色暗褐色を呈し、口径6.6cm、底径5cm、器高1.2cmを測る。00027は底部の上げ底化が著しい小皿である。器色は暗褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径7.8cm、底径6.6cm、器高1.9cmを測る。00028は全体に薄づくりの小皿で口縁端部内面がやや窪む。器色は赤褐～淡褐色を呈し、焼成はやや軟質である。口径11.5cm、底径7cm、器高2.35cmを測る。00025は高台付小碗である。外面部に褐色味を帯びた灰色釉、外底および内面に灰白色釉をうすく掛ける。李朝陶器か。口径9cm、底径4.1cm、器高3.1cmを測る。00030も灰釉陶器小型碗である。底部を欠失する。内外面ともに差々褐色をおびた淡灰色釉を施す。生地に石英砂を多量に混入。口径9cmを測る。00031は青磁器碗である。体部外面には蓮弁文の退化した平行沈線文を施す。釉は内外面ともに淡緑色のものを厚く掛けた。口径11cmを測る。明代製品か。00029は摺鉢か。外面は全面スス付

### 擾乱壙出土の遺物

着。外面に荒いタテハケ目調整。内面も荒いナナメハケ調整後に4本単位の飾描文を施す。瓦質で焼成堅緻である。口径22~24cm程度か。

擾乱壙VI出土遺物 (Fig. 3・12) 00032は青磁器である。外底部のみ露胎でセピア色を呈する。釉は淡緑色で内外面ともに厚い。体部外面および内定部にはヘラ描きの花文を施す。また見込みとの境には2条沈線を運らす。底径5cm。

擾乱壙IX出土遺物 (Fig. 3・12) 00037は口縁部が内彎気味に立あがる小皿である。底部は薄く、処理が荒い。器色は淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径11cm、底径6.6cm、器高2.5cmを測る。00035は直線的に開く口縁を有する。器色は

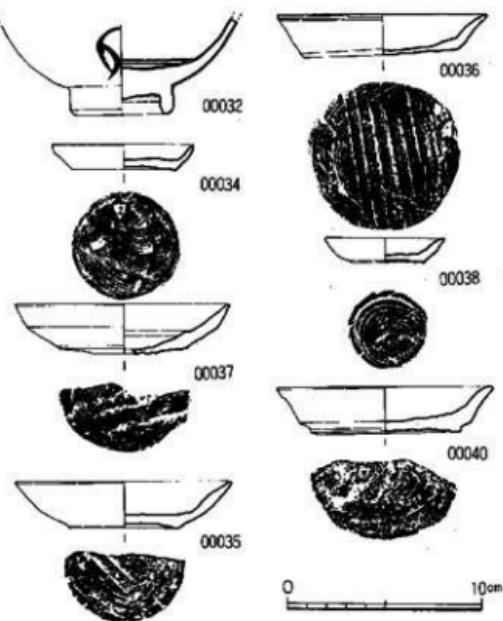


Fig.12 摰乱壙VI・VII・XI・XIII, XIV出土土器実測図 (1/3)

暗褐~淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径11cm、底径5.8cm、器高2.4cmを測る。00036は底部に板目压痕をのこす。全体に薄づくりで、器色は淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径10.8cm、底径7.8cm、器高1.8cmを測る。

擾乱壙XIII出土遺物 (Fig. 3・12) 00038は非常に小形の皿である。内外面ともに横ナデである。器色は淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径6.2cm、底径4cm、器高1.2cmを測る。00040は器壁の厚い中皿である。調整は内面一部に横ナデが残る。器色は淡赤褐色を呈し、胎土に石英砂を多く混入する。焼成は堅緻である。口径11cm、底径6.8cm、器高2.4cmを測る。

#### 4. 遺構検出面出土の遺物 (Fig.13~15)

##### 土師器皿 (Fig.13)

00048は浅い小型の皿である。内外面ともに横ナデが残る。器色は淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径7.4cm、底径4.5cm、器高1cmを測る。00050は非常に浅い小皿である。内外

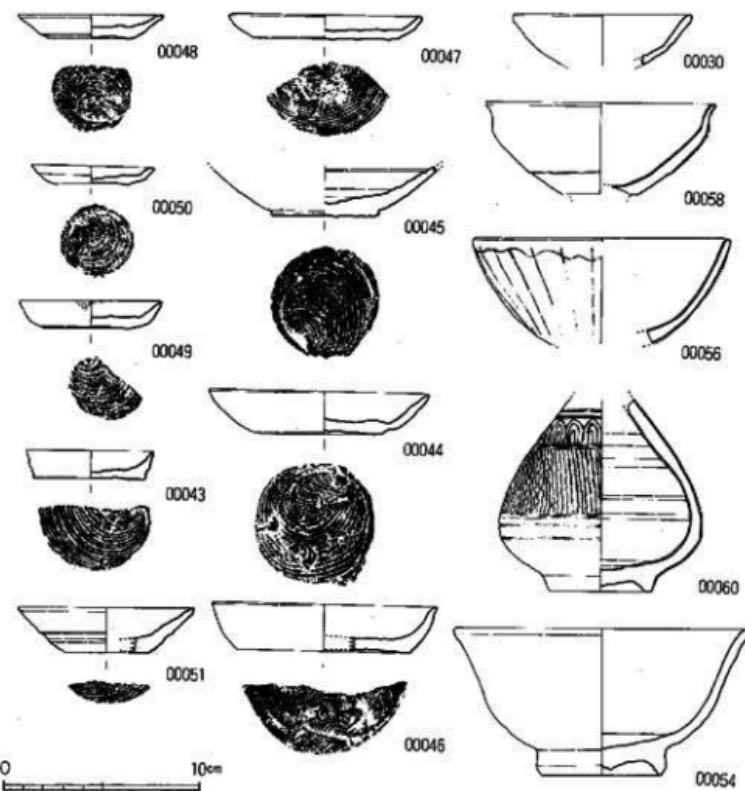


Fig.13 遺構検山面出土土器実測図(1) (1/3)

面ともに横ナデ調整である。器色は淡赤褐色、胎土密、焼成堅緻である。口縁内外にスス付着し、焼明として使用されたものか。口径6.25cm、底径3.8cm、器高1cmを測る。00049は内湾気味に立あがる小皿である。調整は内外面横ナデで、内定部ナデである。口縁内外にスス付着する。器色は暗黄褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径7.3cm、底径4.5cm、器高1.4cmを測る。00043は立あがりの直立した小皿である。器色は淡黄褐色を呈し、胎土密、焼成軟質である。口径6.4cm、底径5.4cm、器高1.4cmを測る。00051は底部から直線的に外方に開く口縁を有する小皿である。器色は外面黒褐色、内面暗褐色を呈する。胎土は密で、焼成堅緻である。口径9cm、底径4.4cm、器高2.3cmを測る。00047は口縁立あがりの低い小皿である。器色は淡褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。口径10cm、底径7.5cm、器高1.3cmを測る。00045は口縁端部

遺構検出面出土の遺物

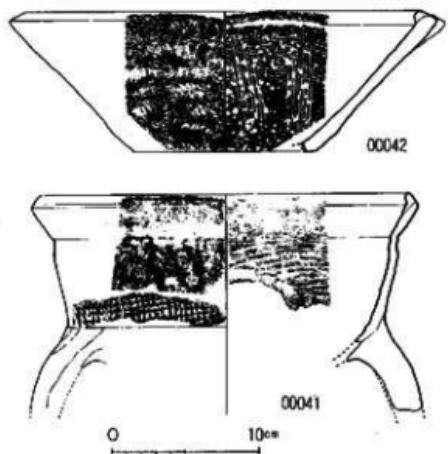


Fig.14 遺構検出面出土土器実測図(2) (1/4)

を欠失する。調整は外面横ナデを施す。底部端は不整な高台状となる。器色は淡赤褐～淡褐色を呈し、胎土密、焼成非常に緻密である。底径5.6cmを測る。00044も体部との境でくびれる小皿である。器色は淡褐色を呈し、黒斑多し。胎土は密で、焼成堅緻である。口径11.4cm、底径6.3cm、器高2.2cmを測る。00046は内底および口縁内面にススが付着する。器色は内外面ともに淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。底部端に横ナデを残す。口径10.6cm、底径9cm、器高2.4cmを測る。

陶磁器 (Fig.13)

00058は天目茶碗である。底部を欠失するが、口縁端部は小さく外反する。外面底部近くは露胎となるが、他は比較的厚く暗茶褐色釉をかける。瀬戸天目か。口径11.8cmを測る。00056は青磁碗である。底部を欠失する。外面は口縁直下に波状沈線1条を廻らし、この後に蓮弁文の退化した平行沈線を施している。内外面とともに分厚い淡緑青釉を施す。内面には大貫入多し。口径13cmを測る。明末の所産か。00060は李朝三島手瓶である。口頸部を欠失する。胴最下部および内面はケズリ痕が顕著であり、これに淡灰色釉を比較的厚く施す。文様帯は同部中位に集約されており、精緻な文様構成である。底径5.2cm、現存高10cm、胴最大径10.4cmを測る。00054は李朝磁器碗か。内外面全てに白灰色釉を施している。生地は白色で、見込みとの境に一条沈線を廻らす。口径15cm、底径7.6cm、器高6.2cmを測る。16世紀代の所産か。

瓦質土器 (Fig.14)

00042は瓦質土器摺鉢である。器色は外面が灰～灰黒色、内面淡黄褐～灰黒色を呈する。調整は外面に指おさえ、ナデが顕著で、内面荒い横ハケ目を施した後8本単位の梅描文を施す。内底部は磨減が著しく、端部はくぼむ。胎土に石英細砂の混入多く、焼成は堅緻である。口径29cm、底径12.4cm、器高10.5cmを測る。00041は足釜である。山口県周防地方に多くみられる。胴部は深く、口縁

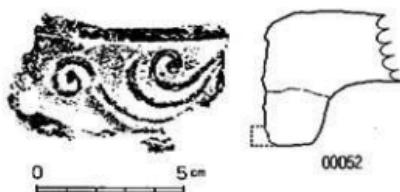


Fig.15 遺構検出面出土瓦拓影 (1/2)

## 第2章 第53次調査

端部が鎌首様に屈曲する。外面はスス付着し、脚付根には荒い格子目叩きがのこる。また内面は荒いナナメハケを施した後口縁は横ナデを施す。口径25cmを測る。

### 瓦当 (Fig.15)

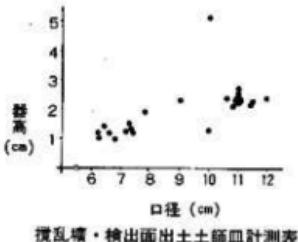
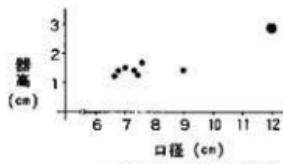
00052は軒平瓦破片で、器色は淡灰色を呈する。下端面は全て横ナデで、上端は横ナデが残る。他はヘラ削りを施す。扁行唐草文か。文様彫りは浅い。

## 5. 小結

これまで第53次調査で検出した土壙9基、溝遺構3条および近世以降の土壙群(搅乱土壙)・遺構検出時に出土した土器類について説明を加えてきた。

遺構は前述のように近世以降の搅乱壙との切りあいが多く、十分にその性格・時期を決定することが困難であったが、SK-09などの明らかに上壙墓と考えられるもの以外は殆どが生活残滓を投棄する土壙と考えられる。また土壙・溝から出土した遺物類は殆どが土師器皿で占められるが、その法量はSK-09出土のものを除くと口径7cm前後、器高1.5cm前後の小型のものが多く、これに明代青磁器・李朝陶磁器類を混じる。他に搅乱壙・検出面出土の土師器皿は法量から大きく二群があり、中世期後半～近世にかけてのものと考えられる。

従って、本調査地点の調査成果からこの周辺の市街形成が14～16世紀にすでにあったことが確認された。



# 第67次調査

## 1. 調査の概要

1989年12月、筑豊金網販売株式会社から、博多区冷泉町1番6号について埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が周知の博多遺跡群にかかること、予定建築物の地表下に与える影響が大きいことから、文化財保護法57条2項に則り発掘調査が必要との判断を示した。その後、建築工程を含めた協議を行ない、基礎杭を先行し、表土剥ぎ取りに併行して、発掘調査を実施することになった。条件整備が整った1990年8月6日に調査用具を搬入、翌7日から9月3日にかけて調査を行なった。調査中は、委託者の筑豊金網をはじめ施工にあたった鏡高組の中村所長、袖比氏に配慮を賜わった。

調査地点は、博多浜の中央部に位置し、東接する4次調査では、中世の井戸、溝が検出されている。同安窯系青磁を含む東西方向の溝は、今回の調査区に伸びることが予想されており、その時期や埋土の状況確認を目的とした。

調査工程としては、近世までの擾乱を堆土として持ち出し、以下の面で遺構検出を行なうことにした。狭い面積のため、道路寄りの15m<sup>2</sup>を調査し、堆土置き場を確保した。その後、調査区に沿って、東西に各々試掘溝（東トレンチ・西トレンチ）を設定し、中世の整地面を検出し、井戸をはじめとする遺構の掘り下げを行なった。



完成した新社屋（右から2番目の建物）

## 2. 検出遺構

調査区に2mのメッシュを組んで、遺構検出を行なった。平面プランが円形の土壙については、SKと表示したが、SK05、10、11、16、18の5つは、井戸跡である。SK02~04、08、15は、掘り下けた結果欠番としたので、土壙が10基になるが、完掘していないものがあるので、井戸は更に増えそうである。井戸は、SK10(近世)のように桶が遺存しているものは他になかった。他の井戸跡も恐らく桶組で、溝水部に曲物を置くタイプであろう。

SX01は、方形プランの遺構で、鉄滓が集中していることから小鍛錆に関する遺構と考えている。全容を知りえなかったが、獨立柱建物の小規模な工房跡と考えられる。

SD01は、東西方向の溝で、上下二層の中、上層の埋土に焼土が多く含まれていることから、一度に埋め立てられた状況を想定している。溝が調査区内で終わっているのは留意すべき点である。また井戸や土壙と切り合っているので、溝が掘削され、廃棄されるまでの時期はある程度限定できる。



Fig.16 博多遺跡群第67次調査地点の位置図 (1/600)

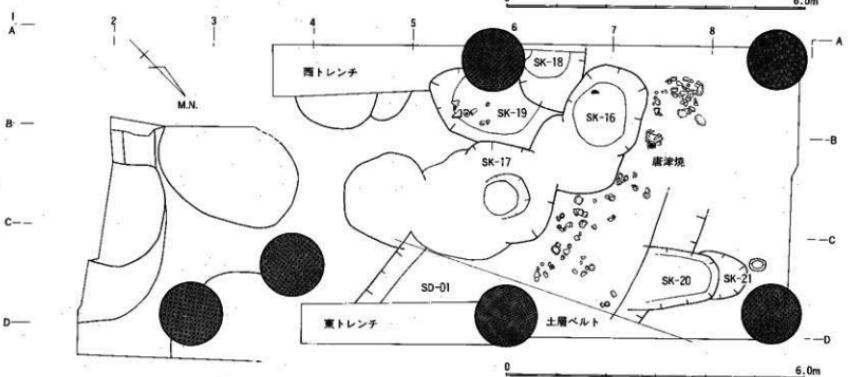
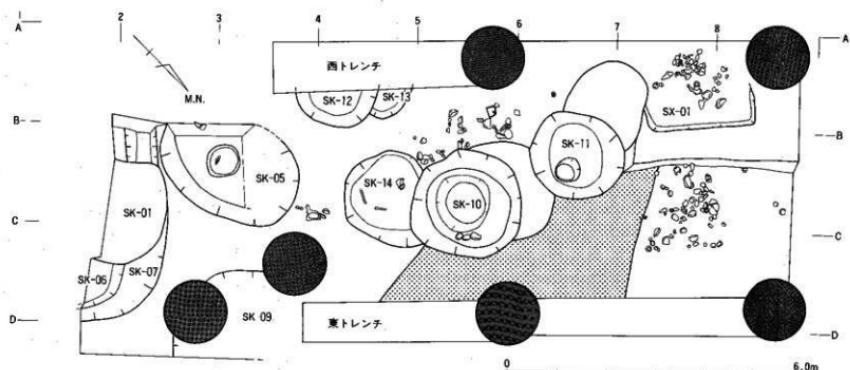


Fig.17 第67次調査区造構配図(上面・上、下面・下、1/80)

## SK01 (Fig.18-1~6)

径2mほどの円形プランの土壤で、近世の瓦片を多く含んでいた。南側の壁にかかっているため全体の半分を掘りえた。

出土遺物 1は白磁の碗である。底部を残存し内底は釉を輪状に削り取る。内面には櫛描文があり外底には墨書き「□本カ」がみられる。2~5は土師器で、2・3は灯明皿である。2は糸切り底で、2・3とも小皿に上部の碗を貼り付けている。4・5は小皿で糸切り底である。6は銅鏡で、「寛永通寶」(初鑄1636年)である。この他に白磁碗II・IV類、青磁龍泉窯系碗I・II類、陶器、伊万里染付、土鍋、土師器小皿、杯、丸瓦が共伴している。

## SK02

3-B-C区で認められた中世の土壤プランである。切合関係は、SK05→04→03→02の順であったが、02~04は、掘り下げる結果、堆積の状況が把握できず欠番とした。

出土遺物には白磁碗IV類、青磁碗、陶器、土師器小皿、杯、須恵器などがあるが、すべて絵片である。

## SK03 (Fig.18-7~9)

出土遺物 7~9は土師器で7・8は小皿、9は杯である。糸切り底で9は底部に焼成後の穿孔が二ヶ所みられる。この他、白磁碗II・IV・IX類、青磁碗、陶器、瓦器碗、土師器などが共伴する。

## SK04

3-C区で円形プランを認めたが、掘り下げるにつれてフェイドアウトしてしまった。

出土遺物は白磁碗VI類、青磁龍泉窯系碗I類、陶器、瓦、土師器小皿などがみられるが、絵片である。

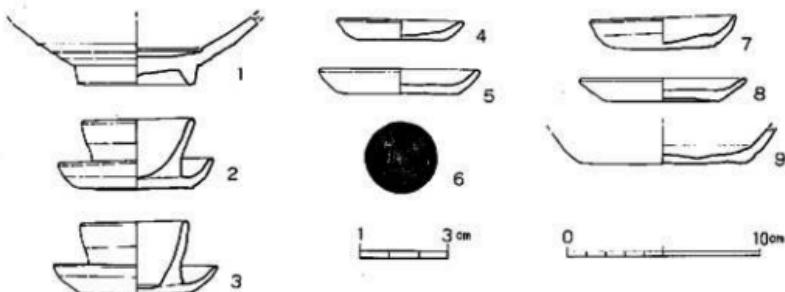


Fig.18 SK01, 03土壇出土遺物実測図 (1/1, 1/3)

第3章 第67次調査

SK05 (Fig.19, Fig.20)

中世の井戸で、掘り方は不整円形、井筒のプランは径70cm弱で、桶組の可能性がある。井筒内の覆上巾から猪の頸骨が出土した。井戸が使用されなくなつてから投棄されたと思われる。出土遺物 1~9は井筒内、20~23は掘り方より出土した。1~4は白磁で、1~3の碗は内底の釉を輪状に削り取る。4の皿は口縁を輪花に刻み、内面には白堆縫が薄くみられる。外底を削って高台を作り出しており直径4cmほどの垫餅痕がある。5は綠釉陶器の破片で乳白色の胎土に明緑~深緑色の釉を薄くかけている。6~17・20~23は土師器である。すべて糸切り底で、6・10~15は茶褐色を呈し、口縁端部を外側から斜めにならしている。7・8は淡黄色を呈し、口縁は外寄りに立ち上がる。16・17は杯で17の外底には板状圧痕がある。18は土製品で

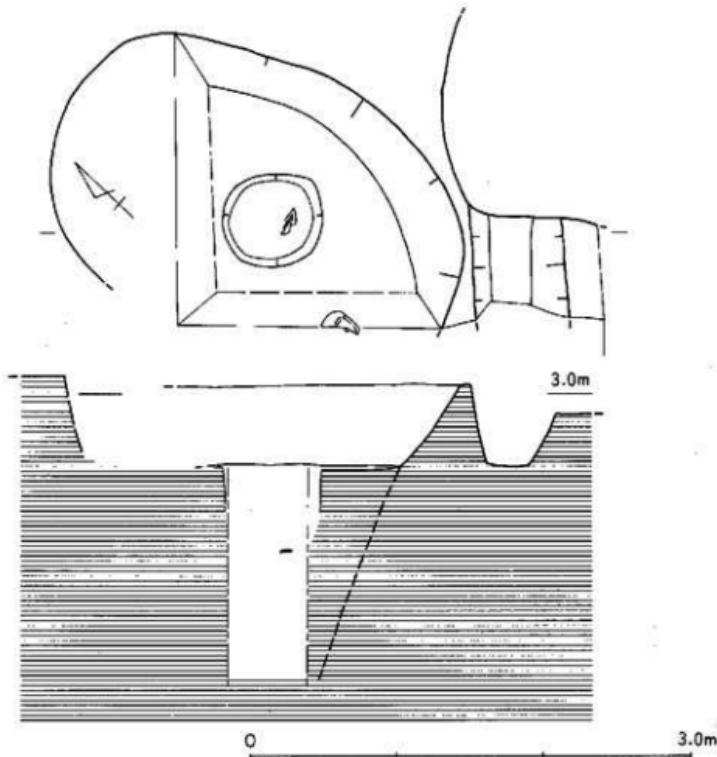


Fig.19 SK05土壤出土状況実測図 (1/40)

検出遺構

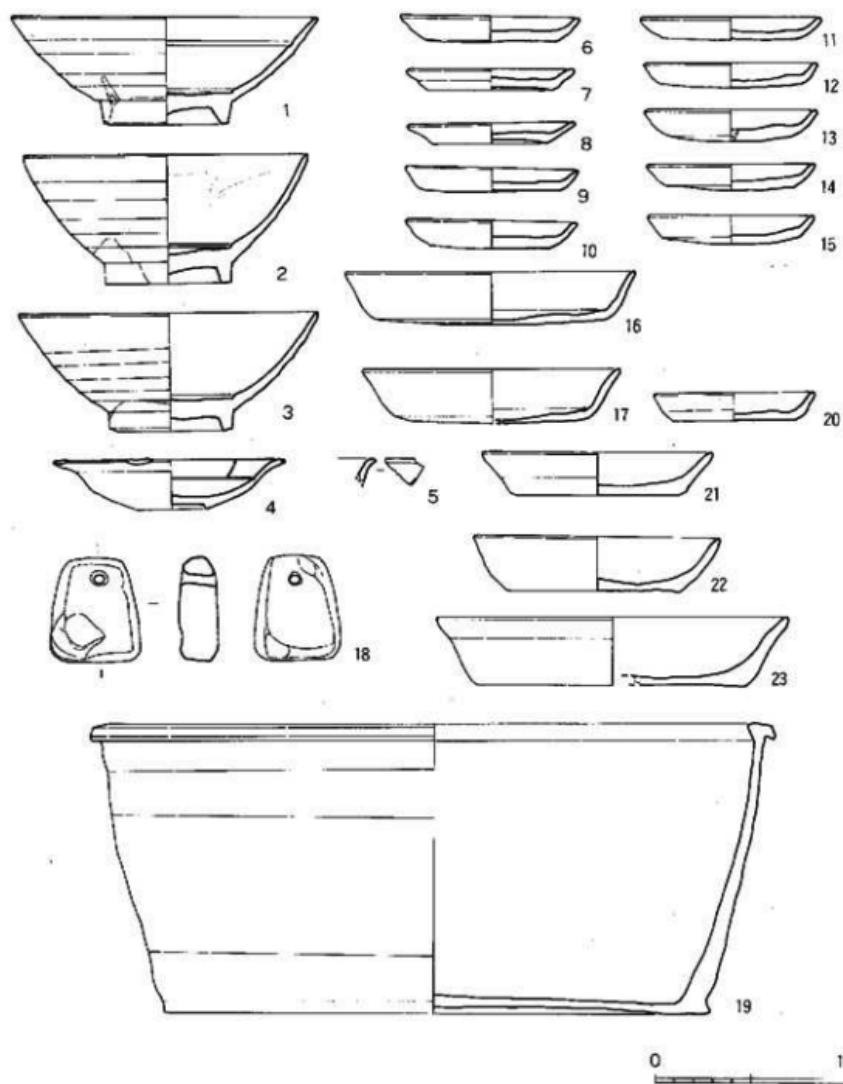


Fig.20 SK05土塹出土遺物実測図 (1/3)

台形をなし焼成後に穿孔されている。一部欠損。19は陶器の盤で、胎土は灰黄褐色～淡茶褐色で砂粒を多く含む。釉は暗黄灰色で内面のみに薄くかかる。口縁はL字状に屈曲し、上部には白色の砂粒が付着する。この他に井筒内では白磁碗II・IV・V類、青磁碗、陶器盤、瓦、土師器小皿、杯など、掘り方では白磁碗IV類、平底皿、青磁同安窯系碗、陶器、須恵器片、瓦、馬の埴などが共伴している。

## SK06 (Fig.21-1~4)

SK07を切り、SK01に切られた土壤で、壁にかかっているため全容を知りえなかった。

出土遺物 1~3は土師器で、1・2の小皿、3の杯とも糸切り底である。4は東播系須恵器の捏鉢である。外面の調整は刷毛目を施した後、雜になで内面はヨコ方向に刷毛目がみられる。共伴遺物には白磁碗IV類、青磁碗、陶器盤、土師器小皿、瓦などがある。

## SK07 (Fig.21-5~6)

SK01、06に切られた土壤で、本来の造構プランは不明である。

出土遺物 5・6は土師器の杯で糸切り底である。この他に白磁碗IX類、青磁、陶器、土師器小皿などが共伴している。

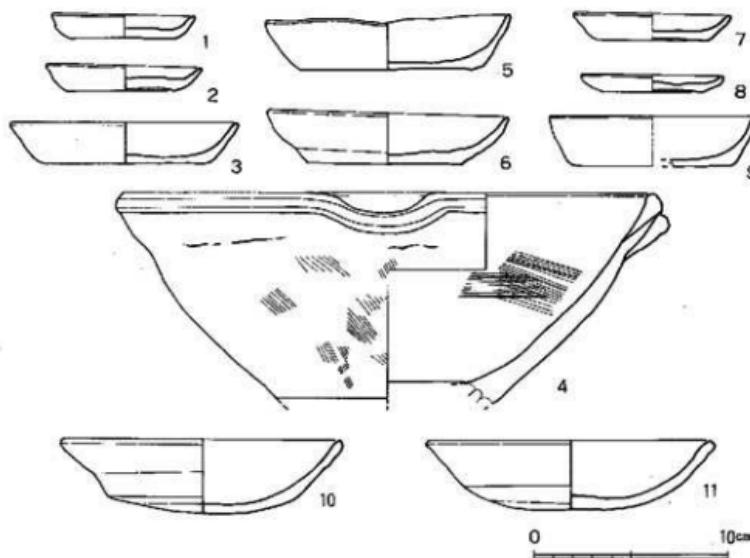


Fig.21 SK06, 07, 08, 09土壤出土遺物実測図 (1/3)

## SK08 (Fig.21-7~9)

SK 01に切られた土壙で、遺構プランは不明である。

出土遺物 7~9は土師器で、7・8の小皿、9の杯とも糸切り底である。この他、白磁碗IV類、陶器、伊万里染付、土師器小皿、杯、平瓦などが共伴している。

## SK09 (Fig.21-10・11)

円形プランの土壙で、東壁と基礎杭にかかっているため全容を知りえない。覆土は、暗褐色砂で、土層はレンズ状の堆積をしていることから古代の井戸の掘り方の可能性がある。

出土遺物 10・11は土師器の杯である。丸底で反時計回りに粘土を巻き上げており外面をナデ、内面をミガキで仕上げている。11は板状圧痕がみられる。白磁碗IV類、須恵器杯片、土師器、瓦などを共伴する。

## SK10 (Fig.22~28)

径2mほどの円形プランの掘り方をもつ桶組の井戸である。掘り方の途中にテラスを設け、桶の外径に沿って掘り込んでいる。桶は、最下部のみ残っていた。湧水部の標高は約0.6mである。伊万里の陶磁器や瓦片が多く検索されていた。

出土遺物 近世の陶磁器類を多量に出土した。

1~8は伊万里染付である。1~7は碗で1は内外に氷裂のような文様が施されている。3は外底に「宜明年製」銘、4・5は外底に満福字銘、6・7は外底に銘がみられる。8はそば猪口で口銘がある。9は伊万里白磁の小杯で口縁を輪花のように刻む。10~12は伊万里染付の小皿で10の体部外側は右上向きの放射線上に削られ施紋されている。11は外底に崩し銘がみられる。「大明年製」か。12は内底にコンニャク判、外底に「大明年製」銘あり。13~20は皿で、13は内外に氷裂のような柄の輪花皿である。16も輪花皿で内底にコンニャク判、外底に「大明年製」銘あり。18は内底にコンニャク判、外底に「大明年製」の崩し銘がみられる。21・22は染

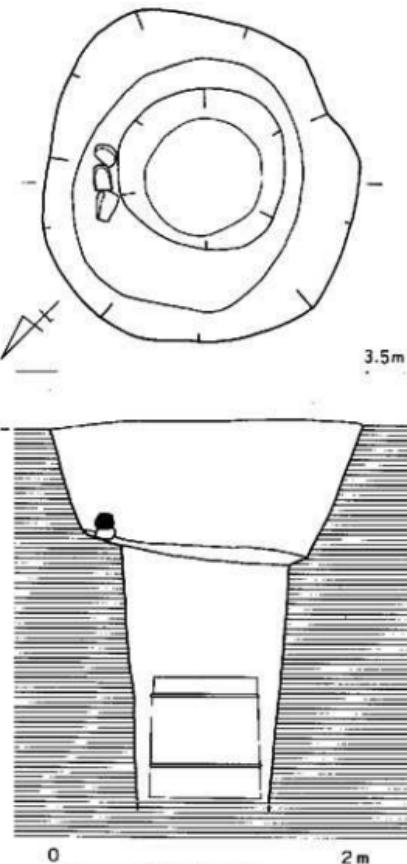


Fig.22 SK10土壙出土状況実測図 (1/40)

第3章 第67次調査

付はなく、色調、器形、法量ともほぼ同じで貼付高台である。24・25は蓋で24の染付は外面のみで口縁がある。25は伊万里色絵でつまみがつき受部があり色絵は内外にみられる。26は唐津系の小皿で内底の釉を輪状に削り取っている。27は仏壇器である。28は染付はなく体部内面に

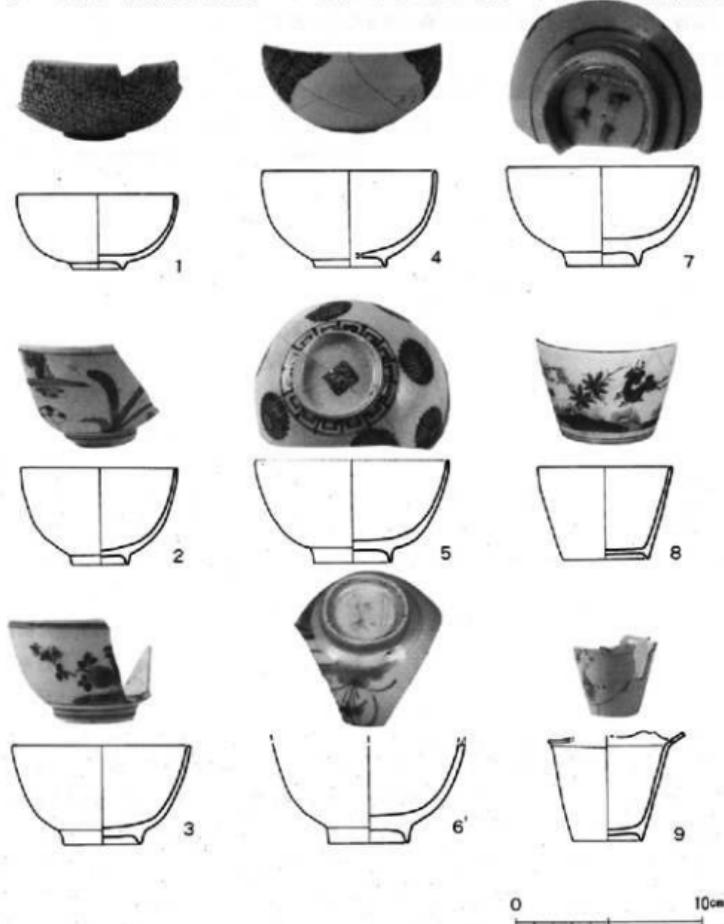


Fig.23 SK10土壤出土遺物実測図(1) (1/3)

検出遺構

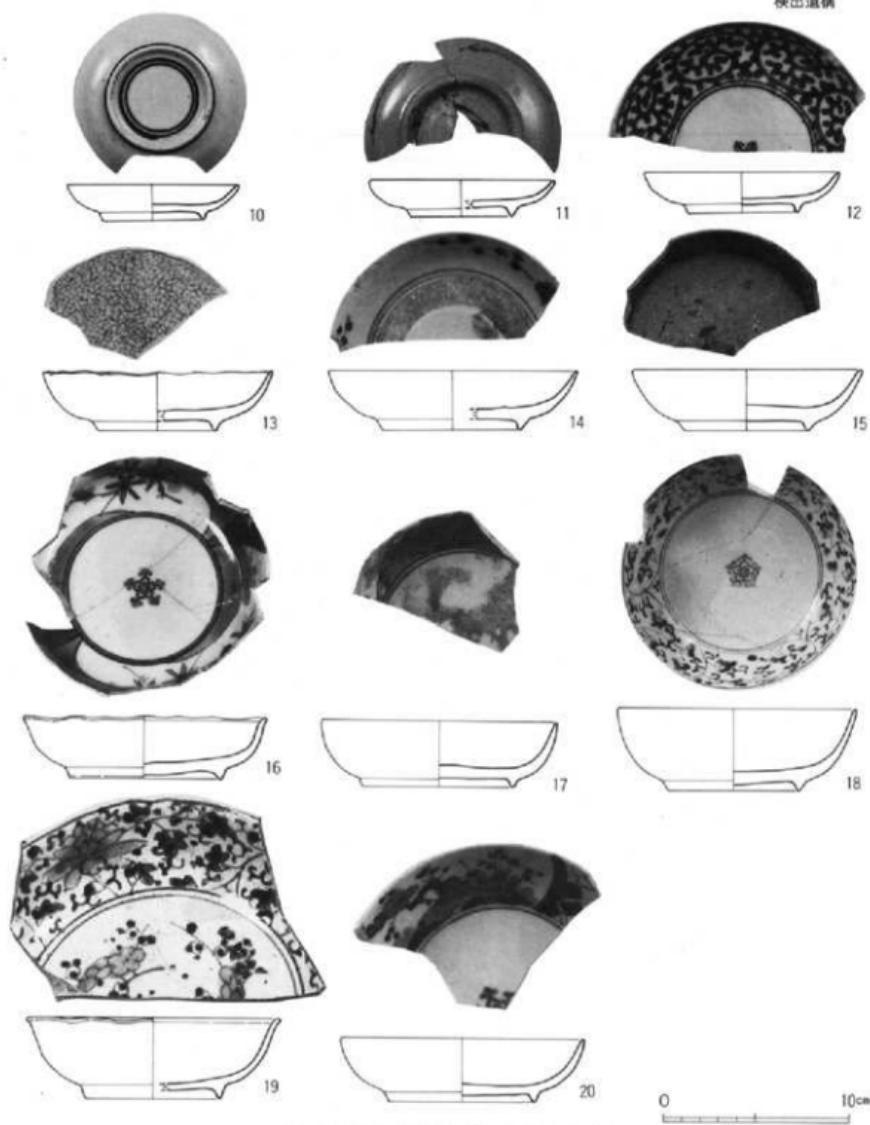


Fig.24 SK10土壤出土遺物実測図(2) (1/3)

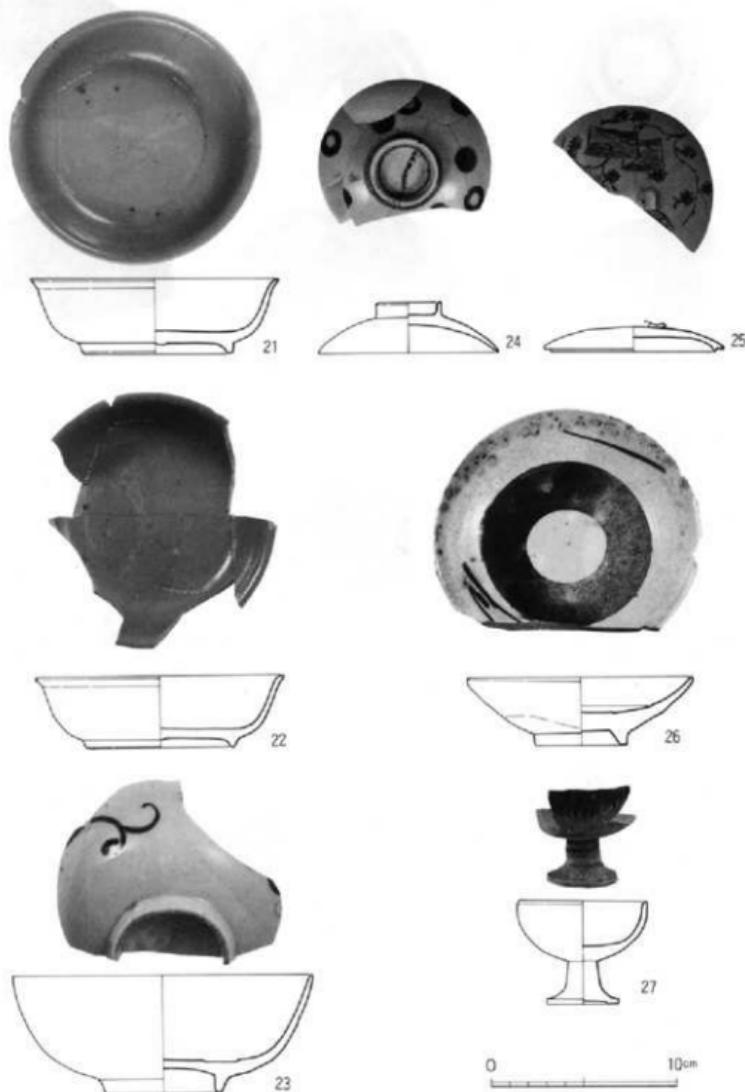
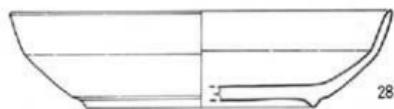
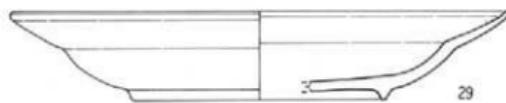


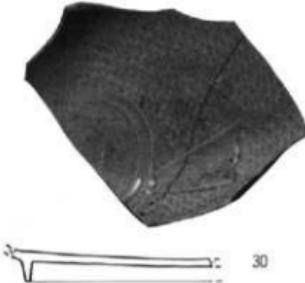
Fig.25 SK10出土遺物実測図(3) (1/3)



28



29



30

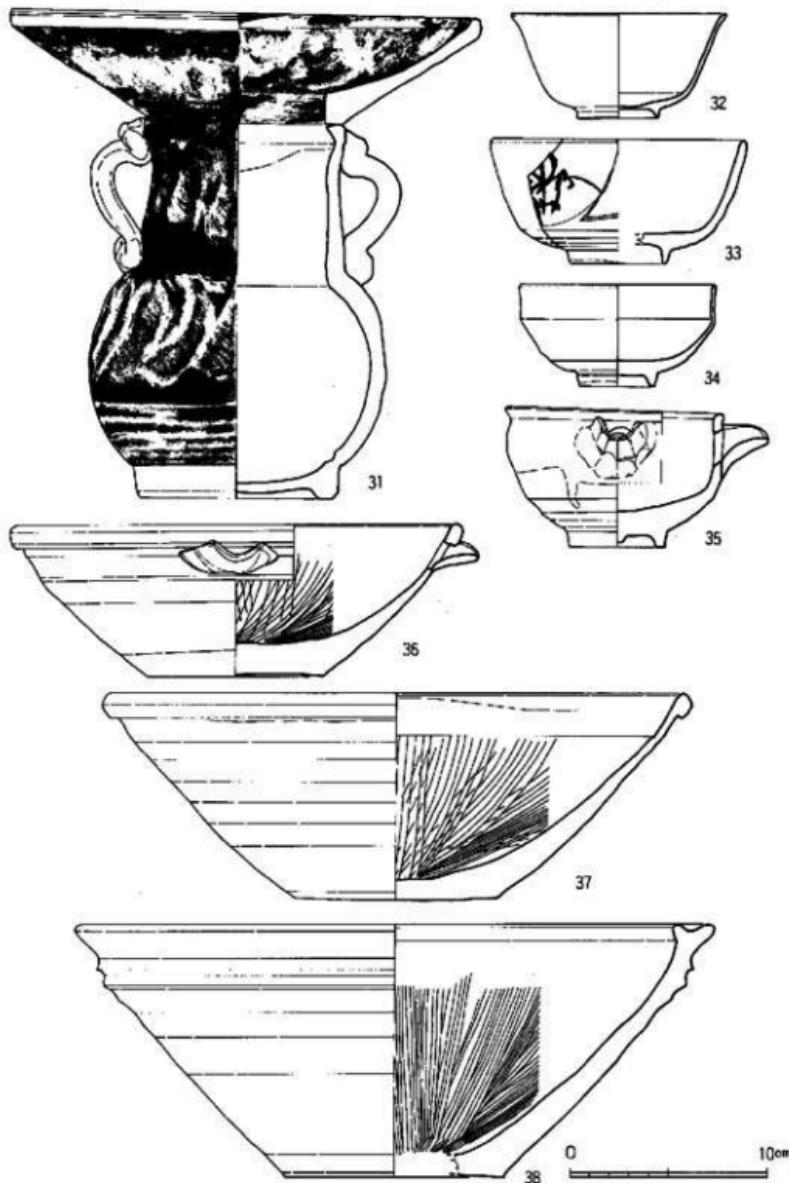


Fig.27 SK10土壤出土遺物実測図(5) (1/3)

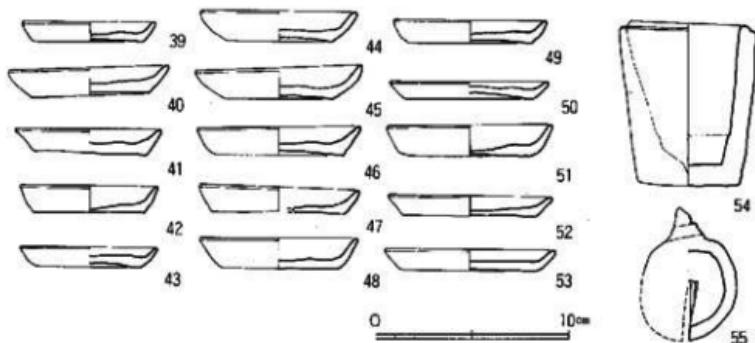


Fig.28 SK10 I: 挿出土遺物実測図(6) (1/3)

型押しによる施紋がみられる。30は鯉の形をした皿で内面は鱗などを写実的に表わしている。31~38は陶器である。31は広口花瓶で口辺部は別に作られ頸部と軸で接着している。耳も貼付で、疊付部と内面の頸部下半以下は無釉。この打刷毛目文は武雄占唐津系の庭木山窯にみられるタイプのものである。32は碗で31と同様の打刷毛目文が施されている。33の碗は体部の内外面に部分的に化粧土をかけ、その上に草花の絵を描いている。疊付部のみ無釉。34の碗は器壁は薄く体部中位でくの字に折れ立ち上がる。施釉は暗茶~黒色で内底のみ暗黄土色を呈し光沢をもつ。35は片口碗で胎土は暗茶褐色で体外半釉。口縁部の内外には煤が付着している。36~38は摺鉢で36は片口をもつ。36~37は糸切り底である。38はY字の口縁で軸は全体にかかり暗茶褐色を呈する。摺目は反時計回りにつけられている。39~53は土師器の小皿で、すべて糸切り底である。口径は7.1~8.7cm、器高は0.9~1.6cmを計る。54は壺壺で内面には布目痕があり、外面は磨滅が著しいが印の枠の痕がみられる。55は土鉢で型押し成形と思われる。この他、内外に刷毛目を施している土師質の大甕（器高約34cm）が出土しており、内面には煤が付着している。また近世の瓦が多量に出土した。瓦当の文様はいずれも巴紋であるが、珠文の数が8~16個（推定）、巴が左、右向きなど少しづつ異なる。SK10には中世の遺物が多く出土しているが、これは中世の遺構を掘り込んだ際に混入したものである。中世の遺物には、白磁碗II・IV・V類、平底皿II類、口禿のもの、青磁龍泉窯系碗I類、同安窯系碗I類、双耳壺、陶器盤などある。SK10の下限は近世陶磁の様式から18世紀中頃があてられる。

## SK11 (Fig.29, Fig.31-1~4)

SK16と17を切る中世の井戸跡である。径1.8mほどの掘り方で、東寄りに井筒を掘り込んでいた。曲物などは残っていなかった。

**出土遺物** 1は白磁の小皿で外底に墨書きがみられる。2・3は土師器である。2は小皿で糸切

第3章 第67次調査

り底、3は丸底の杯で内面は丁寧にみがかれている。4は掘り方より出土した北宋銭の「天禧通寶」(初鑄1017~21年)である。この他、白磁碗II・V類、青磁龍泉窯系碗I類、同安窯系碗I類、同安窯系平底皿、須恵器、瓦器柄、土師器小皿(ヘラ切り、糸切り底)、伊万里染付、色絵、石鍋など共伴する。

SK12 (Fig.30, Fig.31-5)

SK13を切る円形プランの土壙で、現存する長径は1.6mをはかる。

出土遺物 5は土師器の小皿で糸切り底である。細片ではあるがこの他、白磁碗V類、青磁、陶器捏鉢、瓦器柄、土師器などがある。

SK13

SK12に切られた円形プランと推定される土壙である。

出土遺物 白磁碗IV類、青磁龍泉窯系碗I類、土師器小皿などがある。

SK15

3-C区にあった基礎杭に切られた土壙である。平面プランをはじめ明らかでない。

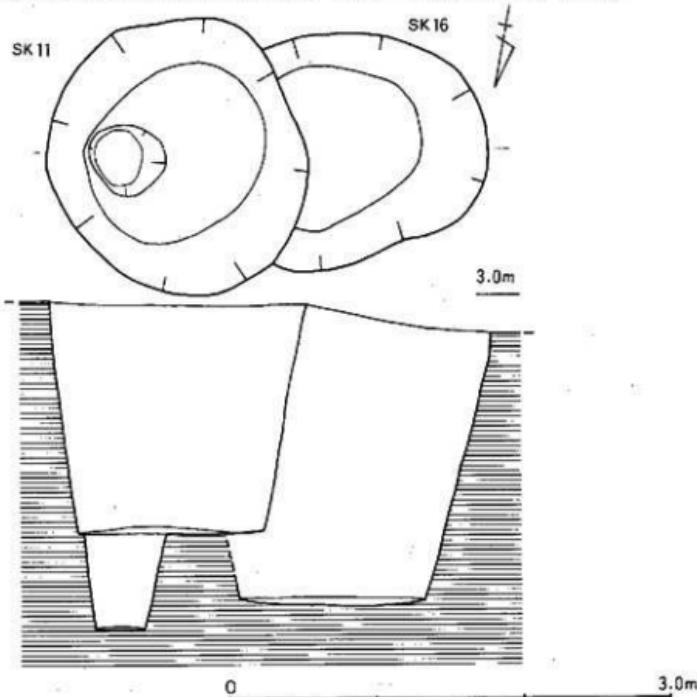


Fig.29 SK11, 16土壤出土状況実測図 (1/40)

出土遺物 白磁碗II・IV・V・IX類、青磁碗、陶器四耳壺、瓦器椀、須恵器、土師器小皿、杯などが出土した。

SK16 (Fig.29, Fig.31-6~9)

SK11に切られ、SK18を切る上塙である。井筒跡を確認できなかったが、井戸の掘り方の可能性がある。巴紋の軒丸瓦は、遺構確認面に近いレベルで出土した。

出土遺物 6~8は土師器の小皿で糸切り底である。9は巴紋の軒丸瓦の破片である。この他に白磁碗、青磁龍泉窯系碗I類、陶器、瓦器椀、須恵器、土師器杯、捏鉢、鉄鋤などを共伴している。

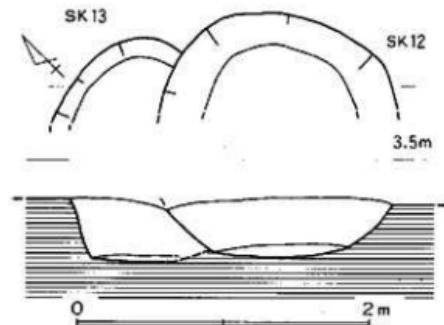


Fig.30 SK12, 13土塙出土状況実測図 (1/40)

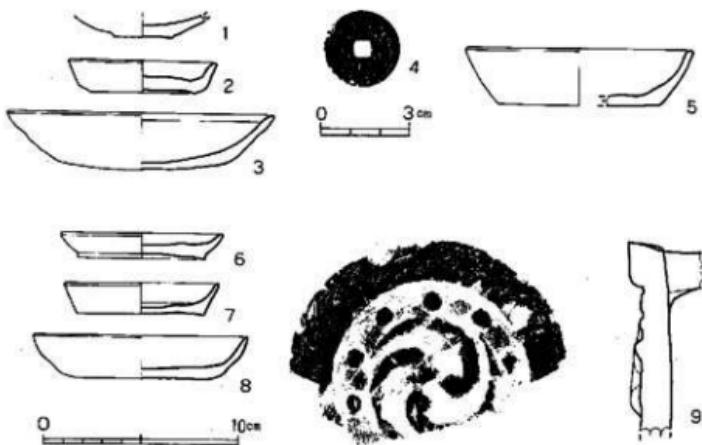


Fig.31 SK11, 12, 16出土遺物実測図 (1/1, 1/3)

## SK14 (Fig.32, Fig.33)

SK10に切られた不整円形プランの上塙である。磁灶系の四耳壺は、SK10の攪乱によって他の土壤まで破片が運ばれてしまったが、本来は、SK14に属するものである。陶磁の他に、骨が共伴しており、人骨とすれば、興味深い事例である。

**出土遺物** 1・2・5は白磁の碗である。1は口縁を玉縁状になし内底は沈窓線がみられる。体外半袖。2は外面に線描文があり口縁部を外彌する。3は定窯系の白磁小碗である。底部の細片で白色の胎土に内底には暗黒褐色の文様が描かれている。器壁は非常に薄く高台は低く小さい。器種は異なるが類似が博多遺跡群第6次調査概報(福岡市博多区冷泉155の調査)にみられる。定窯の托で同じ暗黒褐色の文様が施されている。4は磁灶系の四耳壺である。釉は淡灰緑色を呈し体部には鉄釉がかかる。口縁の直上には部分的に砂粒が付着しており、口縁を下にして焼いたと思われる。5～7は土師器の小皿である。底部は回転ヘラ切り底で、8はひずんでおり外底には幅6mm程の板状圧痕がみられる。この他に白磁碗II・IV・V類、青磁、陶器、瓦器碗、須恵器、土師器小皿、杯、平瓦、石鍋などが共伴している。

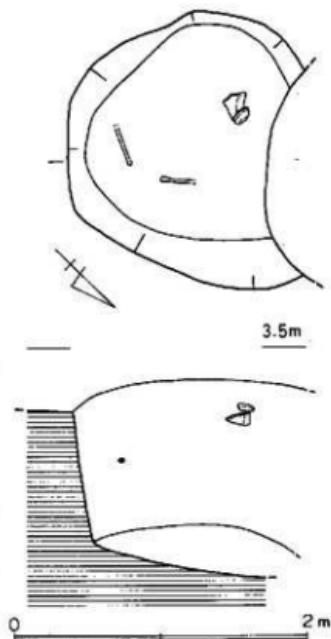


Fig.32 SK14 土塙出土状況実測図 (1/40)

## SK17 (Fig.34-1～11)

SK11とSK10に切られた中世の井戸跡である。井筒は残存していないが、径は65cm程度と推定される。

**出土遺物** SK10への混入を合わせると白磁碗が多く出土している。1～5は土師器である。1の小皿、2～5の杯とも糸切り底で、5は底部に8mm程の焼成前の穿孔がみられる。6～11は白磁である。6は碗V類でやや小さめである。冰裂はなく外底には垫餅痕がある。7・8は碗IX類で口縁は直線的に立ち上がる。7の内底には灰色の粉末が輪状に付着している。8は内底の釉を輪状に削り取る。9は平底皿III類で口縁は内彌しながら立ち上がり端部を小さく内側につまんでいる。体外半袖。10は碗VI類で内面には横描文がある。外底には「藏一カ」の墨書きがみられる。11は碗IV類で外底には「王門」の墨書きがある。この他に白磁碗IV類、青磁龍泉窯系

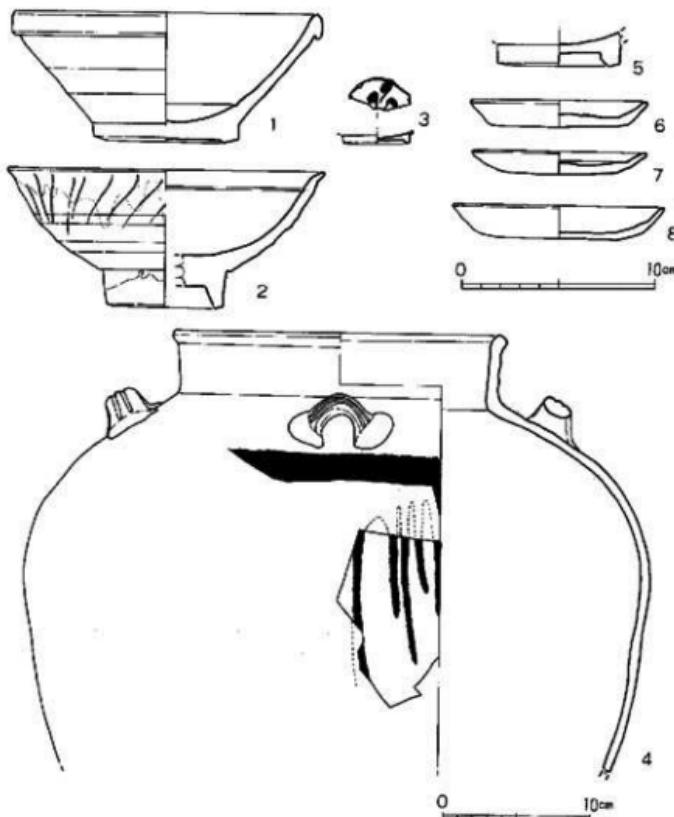


Fig.33 SK14出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

碗Ⅰ類、同安窯系碗、陶器壺、捏鉢、瓦器椀を共伴し、上師器小皿、椀、瓦、伊万里染付などを混入する。

#### SKI8 (Fig.34-12~16)

SK19を切り、SK-16に切られた中世の井戸跡である。南隅に井筒の一部がかかっている。  
出土遺物 12~15は糸切り底の土師皿である。このうち12~14の外底には2~7mm程の板状圧痕がみられる。16はヘラ切り底と思われる。共伴遺物には白磁碗IV類、平底皿、青磁龍泉窯系碗Ⅰ類、同安窯系碗Ⅱ類、瓦器椀、須恵器、土師器小皿、杯、平瓦などがある。

SK19 (Fig.35, Fig.36-1~14)

SK11, 17, 18に切られた不整形の土壙で、出土遺物の多くは覆土上半部に集中していた。出土遺物 1~6は白磁である。1は碗IV類で口縁を玉縁状につくり内底には沈圓線がみられる。外底には墊餅の細片が付着。2は碗II類。3は小碗で内面に彫描紋がみられる。口縁は外彎する。4~6は平底碗III類である。4の口縁は内彎する。7は陶器の灯明皿で、胎土は暗灰褐色で砂粒を多く含み口縁には陶土が付着している。11は陶器の壺で、耳がタテ方向についていた痕がみられる。胎土は灰黒~暗茶褐色で釉は薄くかかり暗灰緑色を呈する。8~10は土師

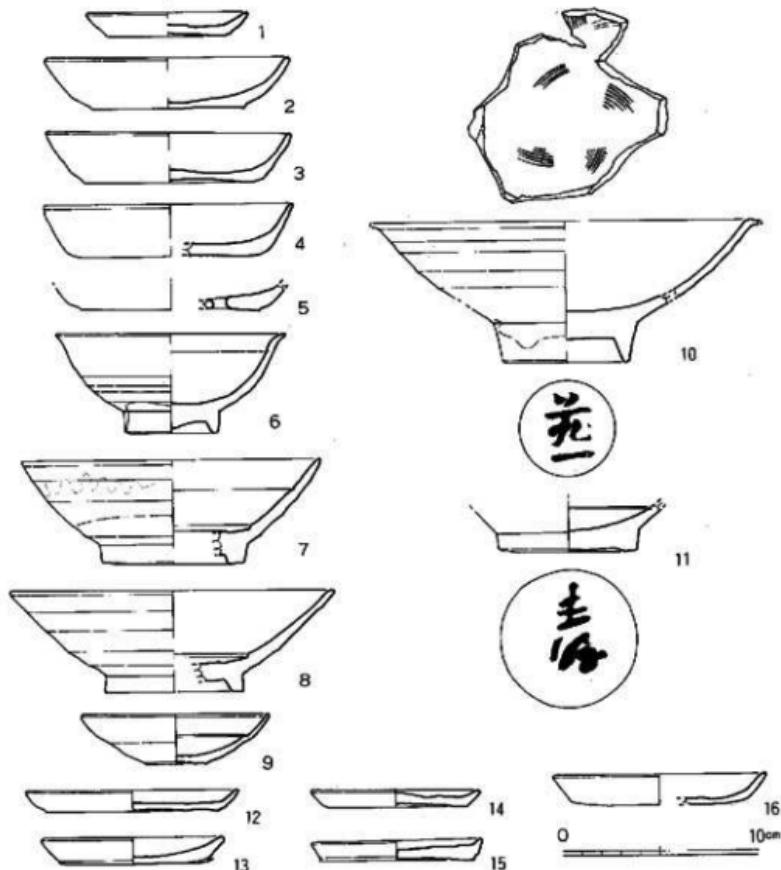


Fig.34 SK17, 18土壤出土遺物実測図 (1/3)

検出遺構

器である。8の小皿、9の杯は回転ヘラ切り底である。10の椀は底部の破片で貼付高台である。外底には墨書きがみられる。12は平瓦の破片で内面は布目痕、外面は斜格子の叩き目がみられる。13・14は毬球玉で13は砂岩質の石材、14は土製品である。共伴遺物には白磁碗V・IX類、青磁同安窯系碗II類、陶器、瓦器椀、須恵器、壺などがある。

SK20 (Fig.36-15・16)

SD01に切られた長楕円形の土壤である。覆土は黒色を呈する。

出土遺物 15・16は土師器の杯である。15はやや直線的に立ち上がる。16の口縁は内側に屈曲して立ち上がる。2つとも糸切り底である。この他に白磁碗IV類、青磁碗、平底皿、陶器、須恵器、土師器小皿、杯などを共伴する。

SK21 (Fig.36-17・18)

SK20に切られた楕円形の土壤である。下面付近で土師器の杯が出上した。

出土遺物 17・18は土師器の杯で糸切りである。17は部分的に煤が付着している。共伴遺物には白磁碗II類、青磁龍泉窯系碗I類、同安窯系碗、陶器、土師器小皿、瓦などがある。

SX01 (Fig.37-39)

SK17に切られた方形プランの遺構をSX01とする。遺構内からは、椀型鉄滓をはじめスラッグが多く出土した。床面は、とくに焼き締めたような状態ではなく、はっきりとしない。小鐵鉈

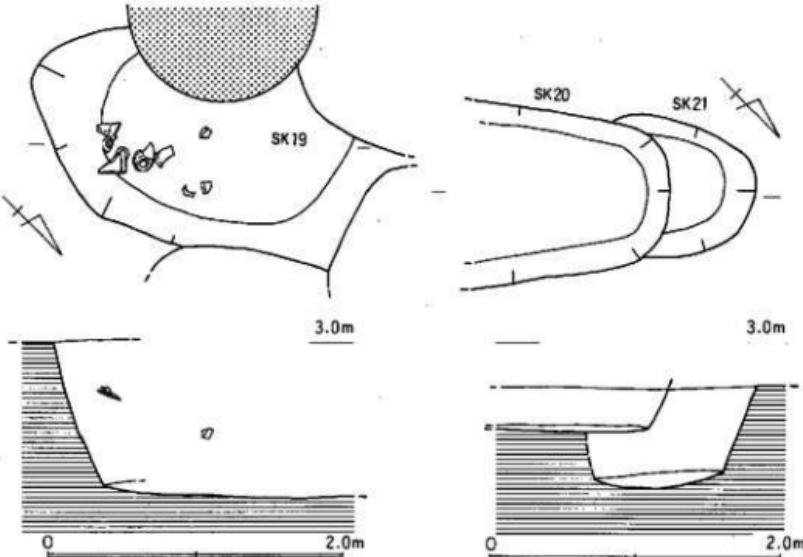


Fig.35 SK19, 20, 21土壤出土状況実測図 (1/40)

第3章 第67次調査

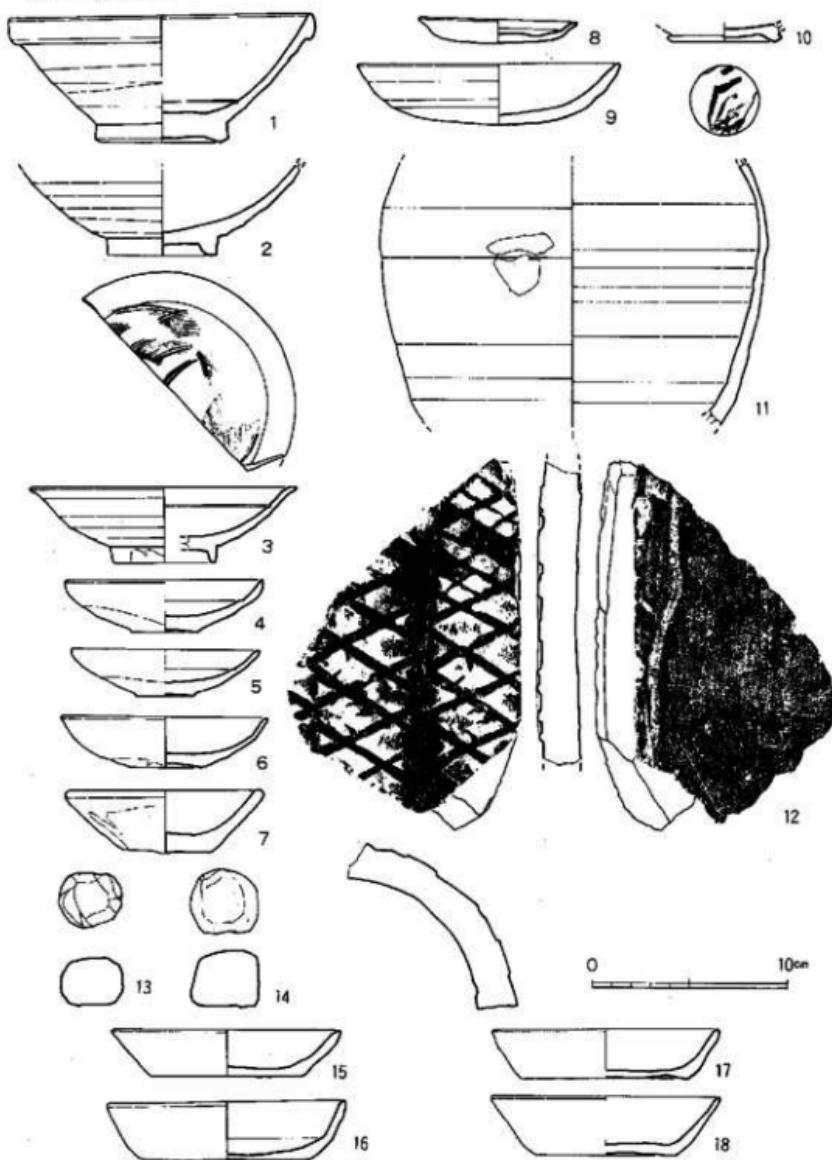


Fig.36 SK19, 20, 21土壤出土:遺物実測図 (1/3)

など工房に関係する可能性が大きい。

出土遺物 1～3は白磁である。1は碗IV類で灰黄色の釉が厚めにかかる。体外半釉。2は碗V類で体部上半と内底に沈圈線がみられる。高台は細くて高く末端はやや外側する。3は平底皿III類で口縁は内側し端部を内側に軽くつまんでいる。4は陶器の碗である。5は陶器A群I類の蓋である。暗黄灰色の胎土に灰緑色の釉が薄くかかる。内面には鉄彩があり外底には「郵」の墨書きがみられる。6は東播系の捏体で口縁端部を斜めに切る。7～22は土師器で7～12の小皿、13～22の杯とも糸切り底である。16・17は内底をなでているが、その他はヨコナデ仕上げている。17は掘り方より出土した。23～32はSX01の下面より出土。23は天目茶碗で口縁はやや肥厚し先細りになって外側する。24は白磁高台付皿で口縁はやや外側し立ち上がる。釉は淡灰緑色でうすくかかる。体外半釉。25は陶器である。胎土は暗茶褐色で体部外面は化粧土をかけ拂刷毛目文様を施している。施釉は口縁～体部上半まで部分的にかけられる。口縁は水平に曲げられ放射線上に拂刷毛目がある。部分的に煤が付着し、香炉と思われる。26～31は土師器の杯である。26～28は糸切り底である。29～31は丸底の杯で底部は回転ヘラケズリの後なものである。30は外底に幅5mm程の板状圧痕がある。31の体部外面には黒斑がみられる。32は上鍍で6.3×1.3cmを計る。中脇みし一部欠損。この他に青磁龍泉窯系碗I類、同安窯系碗I類、陶器、瓦器碗、瓦、鐵津などが共伴し伊万里染付が混入する。また下層ではこれらに加えて青磁同安窯系碗II類がみられ、掘り方では土師器小皿にヘラ切り底と糸切り底のものが出土している。

Fig. 37

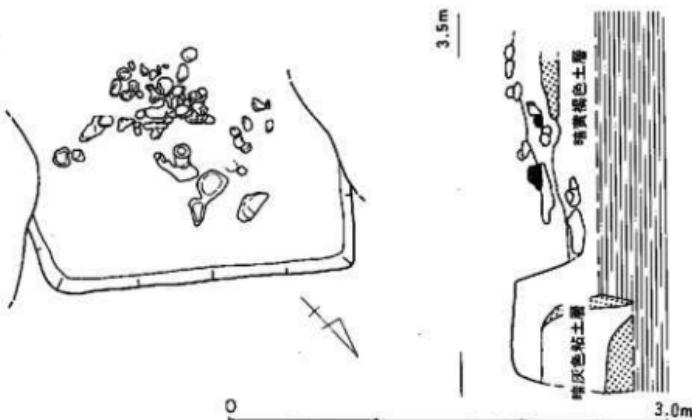


Fig.37 SX01出土状況実測図 (1/40)

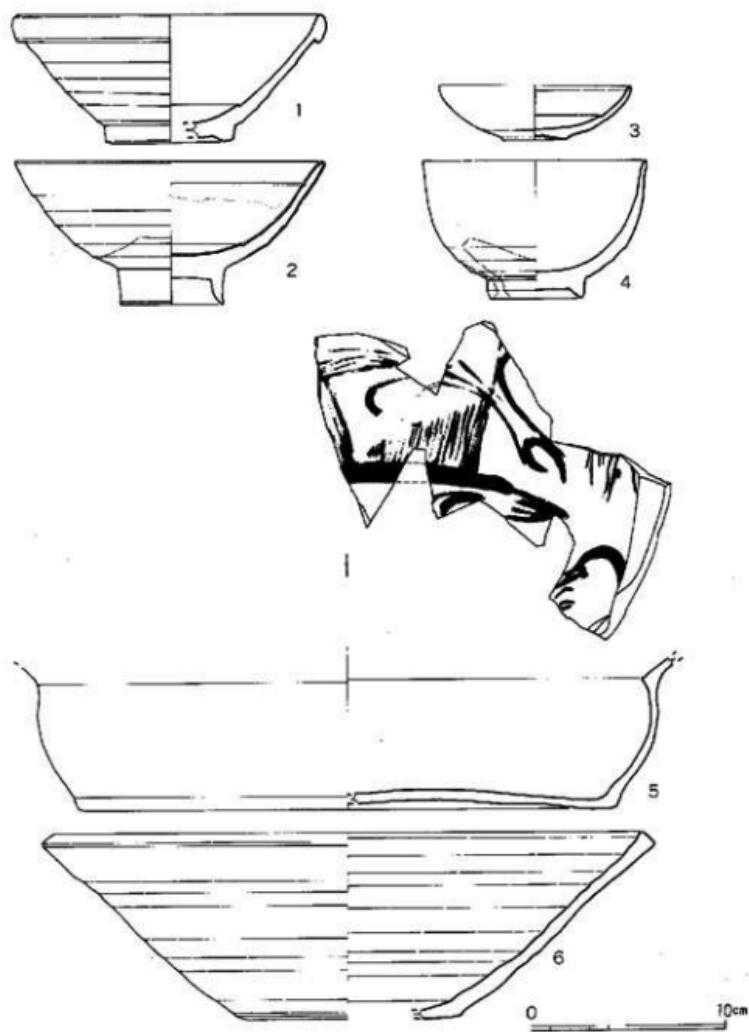


Fig.38 SX01土壤出土遺物実測図(1) (1/3)

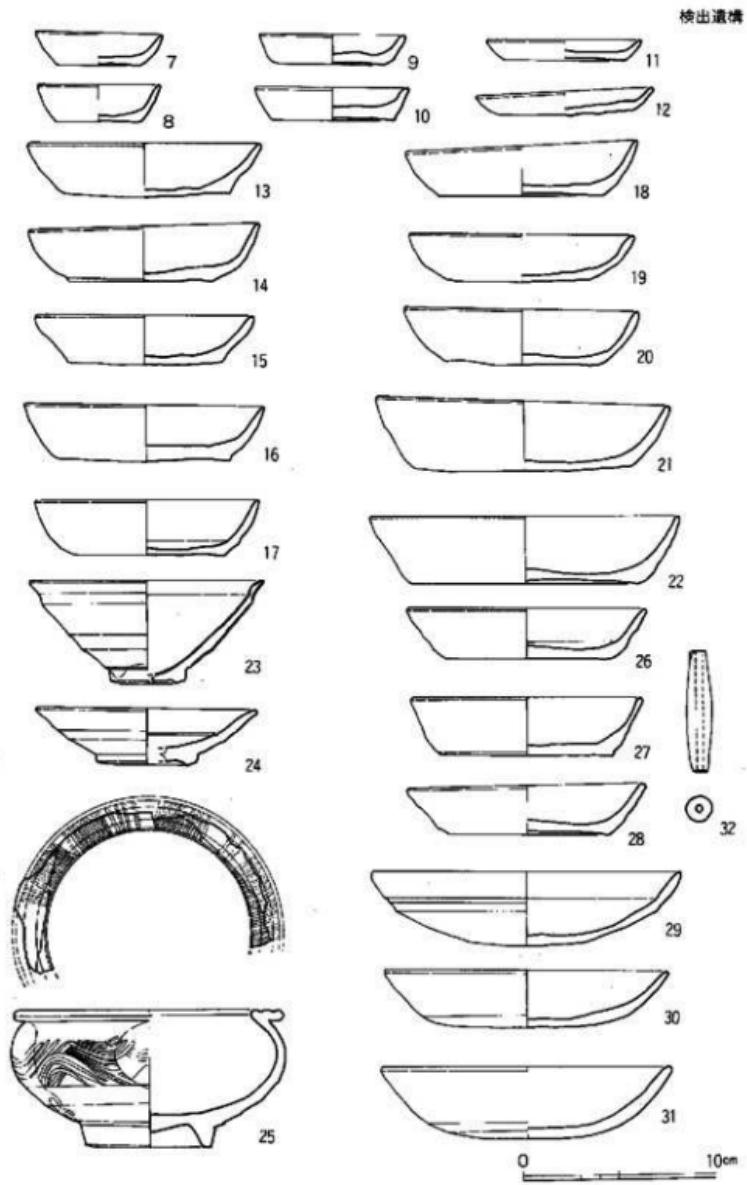


Fig.39 SX01土壤出土遺物実測図(2) (1/3)

## SD01 (Fig.40~42)

東西方向の溝で、4次調査のSD02と同一のものである。造構の切合では、SK10、11、17、20に先行している。幅は上面で約5m、緩いU字型の断面をなす。埋土は、焼土を含む層と、以下の黒灰色土の層とに大別できる。スクリーントーンでアミをかけた部分は、土師器の皿、杯が多く集まっていた。溝が調査区内で終わっている点に注意すべきである。

**出土遺物** 1~18は下層、19~39は上層より出土した。1は龍泉窯系青磁で外面は運弁削り出し、内底には双魚文が貼付けられている。施釉は厚く受付部のみ無釉。2は白磁高台付皿II類で、体部内面に沈圓線があり口縁はやや外側に立ち上がる。3~18は土師器である。3はいわゆる瓦玉で、杯の底部の破片であるがその縁を丸く欠いている。4~12の小皿、13~18の杯とも糸切り底である。21~31も土師器で21~27の小皿、28~31の杯は糸切り底である。19は青磁龍泉窯系碗I類で底部のみ残存し内底には片切形がみられる。20は陶器の小壺である。胎土は暗褐色で釉は黒褐色を呈し不透明である。32~37は土師器で35は小皿、その他は杯で糸切り底である。38は埠の細片。39は石製品である。上下面とも研磨され中央がやや陥る。横面には稜を中心に稜杉紋状の線が刻まれている。下層の共伴遺物には白磁碗IV・V・VI・IX類、口禿のもの、青磁龍泉窯系碗I類、小鉢III類、同安窯系碗II類、陶器、東播系押鉢、土鍋、土師器小皿(ヘラ切り、糸切り底)、瓦、石鍋などがある。SD01(上層)では白磁碗IV類、平底皿、青磁龍泉窯系碗I類、同安窯系平底皿II類、陶器、天目茶碗、瓦器碗、瓦などがある。また直径約3cmくらいの瓦玉が多く出土している。これらはほとんど土師器の底部を利用しているが、中には陶器を利用したものがある。

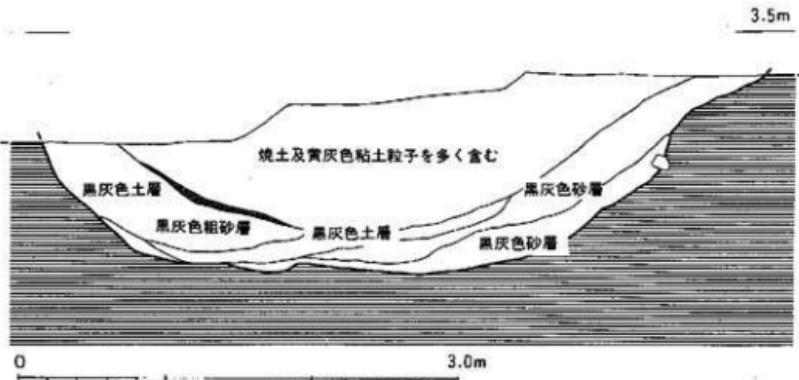


Fig.40 SD01溝西壁土層断面実測図 (1/40)

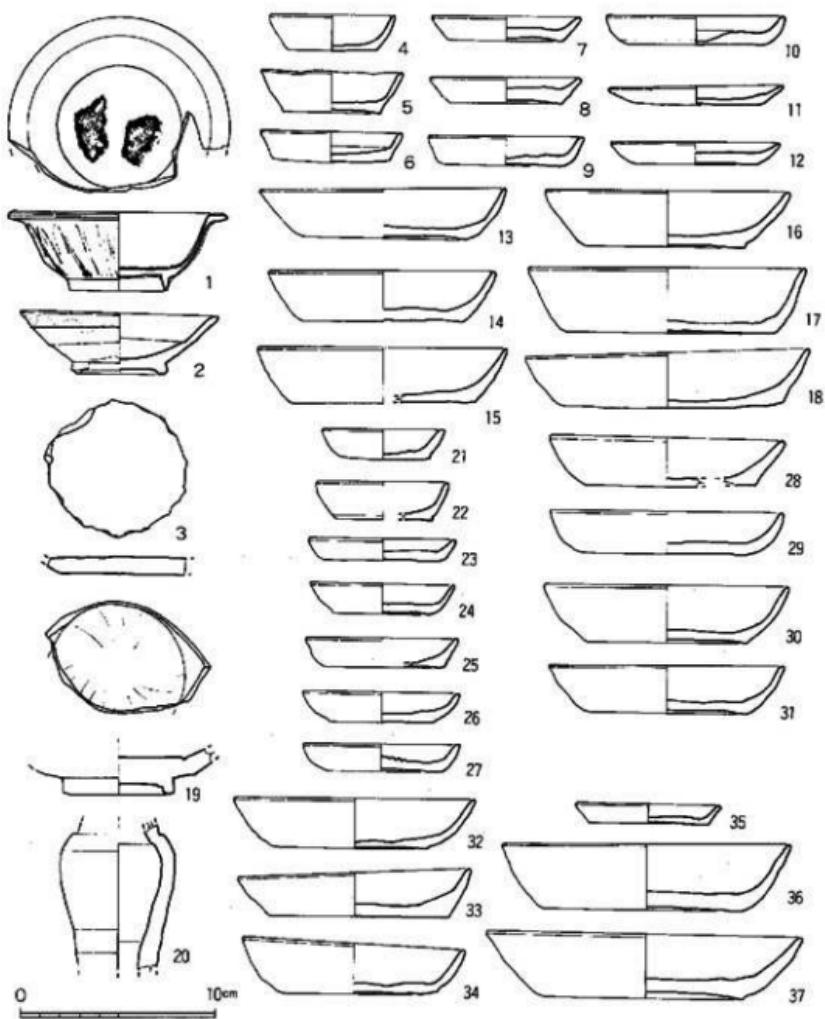


Fig.41 SD01溝出土遺物実測図(1) (1/3)

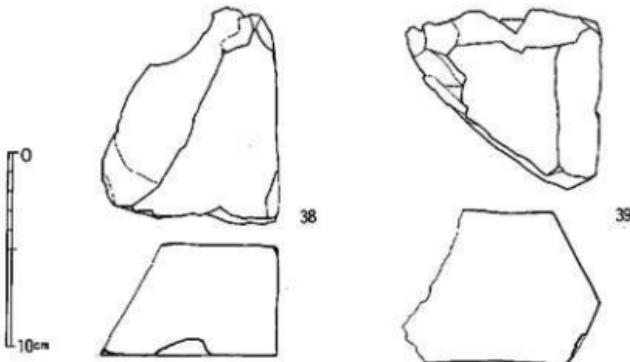


Fig. 42 SD01清出土遺物実測図(2) (1/3)

## 遺構面 (Fig. 43・44)

溝の北側では、整地層に遺物が散布する状況で出土した。その中の主だった資料を紹介する。19の唐津焼の大鉢は、遺構面と同レベルで出土した。本来は掘り方があるべきだが、確認できなかったのでこの項で述べる。

**出土遺物** 1～3は3-B区より出土した。1・2は陶器で底部の破片である。1は暗灰黄色の釉がかかり内底にはスタンプによる文様と3ヶ所に重ね焼きの際についたと思われる陶片が付着している。2は灰～暗灰黄色のセメントのような胎土に暗緑黒色の釉が厚くかかる。内底には菊花文のスタンプが押されている。3は土師器の杯である。回転ヘラ切り底で外底には板状圧痕がみられる。4～19は6・7-B・C区周辺より出土した。4～6は白磁碗である。4はV類で淡灰緑色の釉がやや厚めにかかり外底には墨書がみられる。5もV類である。6は内底の釉を輪状に削り取り、外底には墨書あり。7～18は土師器である。7～13は小皿で7は回転ヘラ切り底、8～13は糸切り底である。内底はなでられており、7・8の外底には幅4mmほどの板状圧痕あり。14は高台付碗で内底には煤が付着。15～18の杯は糸切り底である。19は唐津系陶器の大鉢で内面には松の絵が描かれている。内底には砂目が6ヶ所にある。体外半釉。口縁を外側に折り端部を上方につまんでいる。松浦系古唐津によくみられる器形と思われる。この他に白磁碗IV・V類、青磁、陶器盤、瓦器碗、瓦などが共伴する。

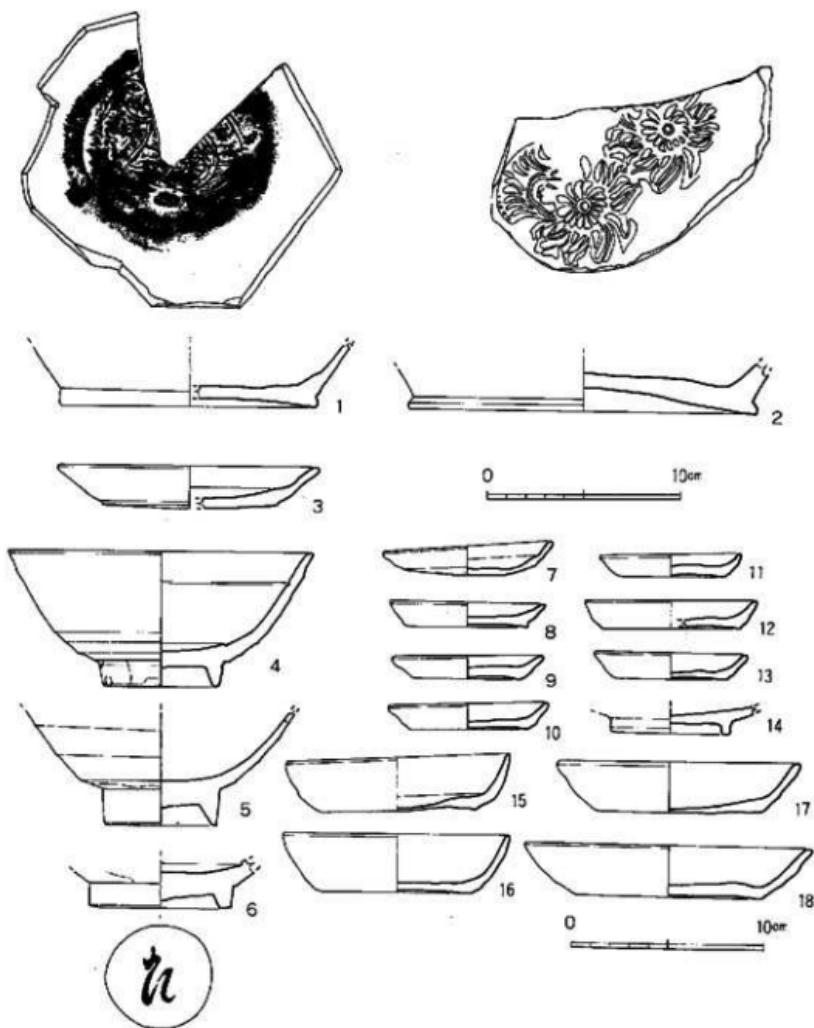


Fig.43 遺構面出土の遺物(1) (1/3)

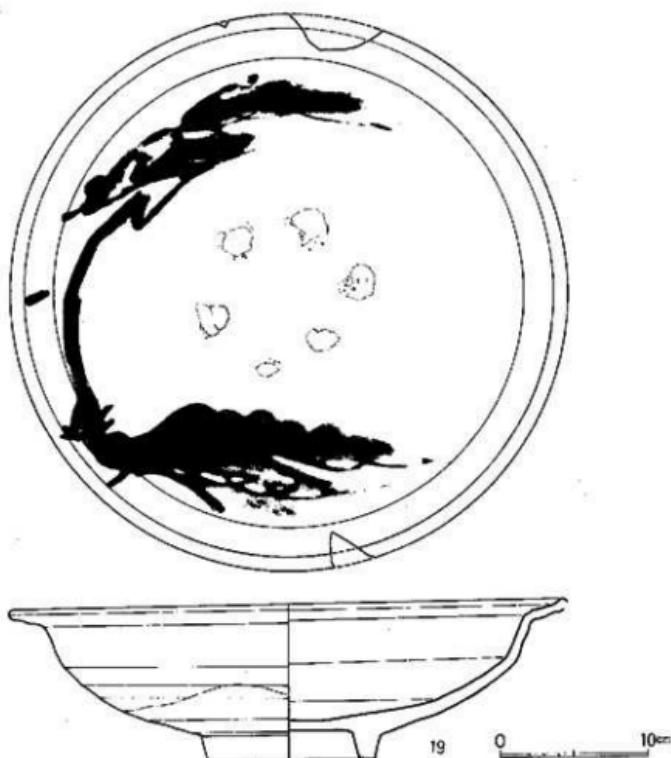


Fig.44 陶構面出土の遺物(2) (1/3)

西トレント (Fig.45)

出土遺物 1・3～7は白磁で1は碗II類、7は碗IV類で外底に墨書きがある。3～5は平底皿III類である。体部中位に沈匂線がありそのあたりから3は内壁ぎみに、4・5はやや外壁しながら開く。釉は淡灰緑色で体外半釉。6は平底皿であるが外底は膨んでいる。内底に沈匂線があり口縁は上面が水平になる。外底に墨書きあり。2は天目茶碗である。8は合子の蓋、9は身で一对になる。型造りで外面に菊花文がみられる。10～12は瓦器の杯である。九底で底部はヘラ削りの後なでられている。17～22は土師器の小皿で、17～20は糸切り底、21・22はヘラ切り底である。17・20は外底には墨書きがみられる。23・24は陶器で23は灯明皿、24は平底の小皿である。この他に白磁碗V・VI・IX類、青磁龍泉窯系碗I類、同安窯系碗I・II類、陶器、伊万

検出遺物

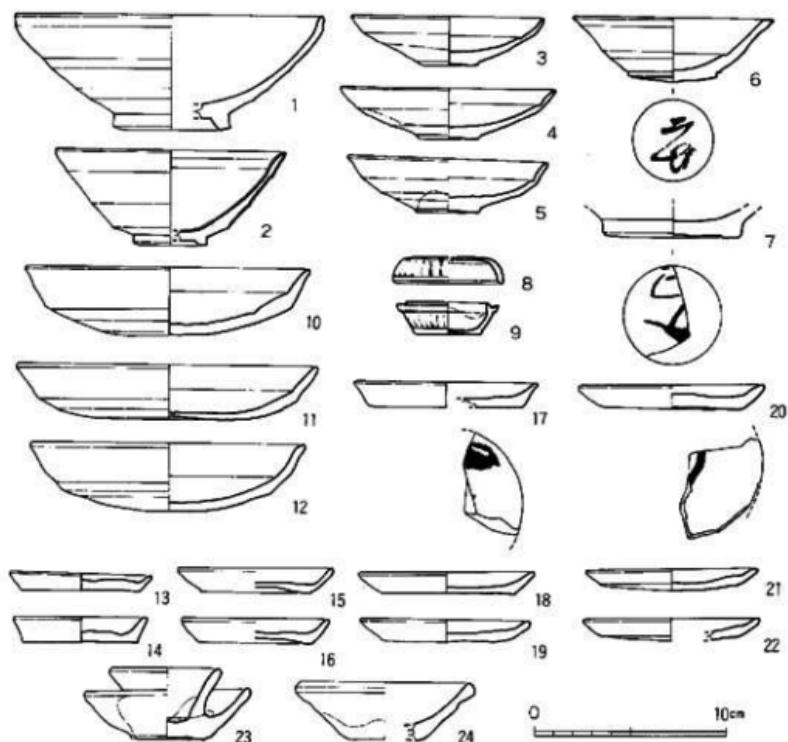


Fig. 45 西トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

里染付、色絵、土鍋、瓦、骨、鉄釘などが出土している。

#### 東トレンチ (Fig. 46)

出土遺物 1～7は土師器の小皿で糸切り底である。8・12は白磁で8の碗は内底に横描文、外底に墨書きがみられる。12は口禿の平底皿である。淡灰緑色の釉で厚めにかかる。体外半釉。9～11・13～15は土師器の杯である。すべて糸切り底。16は須恵質の鉢で口縁端部は内側に屈曲し上面を水平にする。17・18は土鏡である。17は平底で口縁の一部に粘土をたして穿孔する。孔は二ヶ所みられるが完通していない。粘土をたした部分の外側を雜になでている。外底には煤が付着。18は口縁の一部に紐状の粘土を継ぎたし穿孔している。孔は完通する。外面には煤が付着しており外底には刷毛目がみられる。この他に青磁、陶器、伊万里染付、瓦器椀、軒丸瓦(巴紋)、砥石、骨、鉄釘などが出土している。

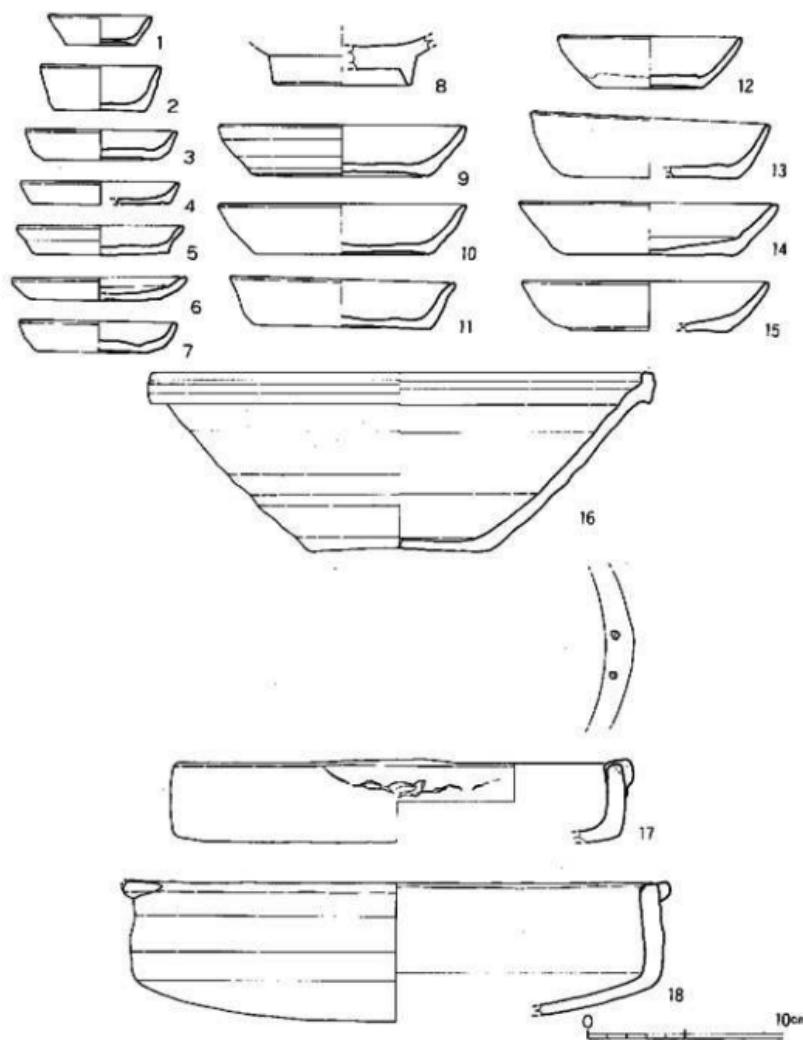


Fig.46 東トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

包含層 (Fig.47・48)

出土遺物 1・2・7・8は白磁である。1・2は碗IX類で内底の釉を輪状に削り取る。口縁

は直線的に立ち上がる。7は外底に墨書がある。「所□カ」。8は平底皿III類である。3・4・6・9~11は青磁である。3・6は龍泉窯系で3は碗1類である。内面にヘラ描文がみられる。6は底部の破片で内面には描描文がみられ内底には庶津が多量に付着。外底には墨書がみられる。「道カ」。4は龍泉窯系小鉢である。体部内面を花弁状に削る。口縁は外側へ水平に折り末端を上方へつまんでいる。釉は暗灰緑色を呈し厚くかかる。疊付部のみ無釉。9・10は龍泉窯系の平底皿で内底にヘラ描文があり、10の外底には墨書がみられる。11は同安窯系の平底皿である。内底に描描文、ヘラ描文がみられる。灰青色の釉が薄くかかり外底は無釉。5・12~19は陶器である。5の碗は唐津系の碗で内外に刷毛目文を施す。疊付部のみ無釉。12・13は灯明

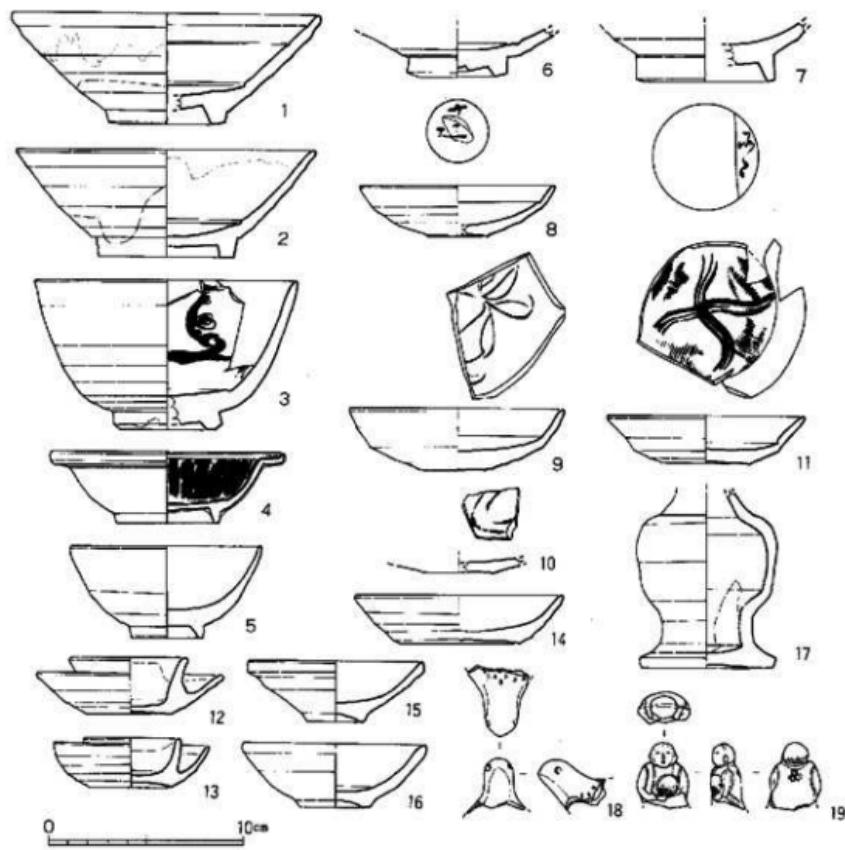


Fig.47 包含層出土遺物実測図(1) (1/3)

第3章 第67次調査

皿で、12は口縁がやや外側する。14~16は皿で14の平底皿は口縁部に煤がたまつて付着。また取手のようなものがついていた痕がみられる。15は口縁端部の外面を斜めに切っている。外底のみ無釉。16は内面のみ釉がかかり暗灰緑色で薄くかかる。17は小壺で糸切り底である。淡灰緑~褐黄色の釉が内外にかけられ、内外底部は無釉である。18・19は人形で、型造りの縫目がある。19は空洞である。20~30は土師器の小皿である。糸切り底で口縁は外側するものが多い。34・35は瓦質土器で丸底の杯である。内面はミガキ、外底は回転ヘラケズリの後などでいる。36は石錘の破片である。内面はミガキ、外面はタテ方向のノミ痕があり煤が付着している。37・38は銅製品である。37の冨金具は、両面に唐草文様が細かく彫られている。上端には孔があり一部に渡金されていた痕がみられる。38は破損が著しく用途不明。この他の出土遺物には白磁碗IV・V・VI類、口禿のもの、高台付皿II類、青磁同安窯系碗II類、青白磁、伊万里染付、瓦器模、土鍋、捏鉢、擂鉢、軒丸瓦、平瓦、七輪、人形の型、石鍋、骨、鐵滓などがみられる。

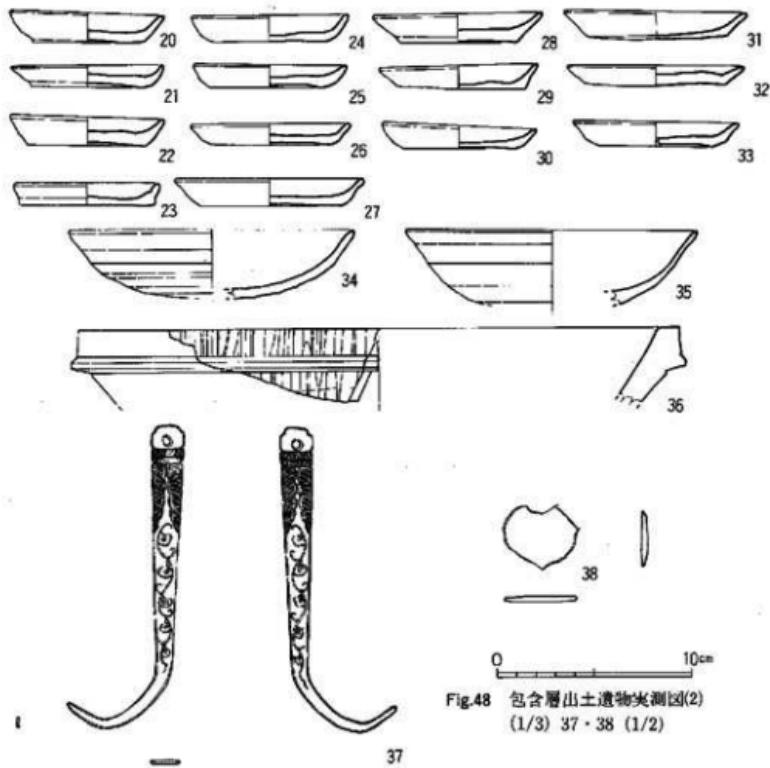


Fig.48 包含層出土遺物実測図(2)  
(1/3) 37・38 (1/2)

## 小結

造構の時期について共伴した土師皿及び杯の計測図の解説を行なう。器種は山本氏の分類に準拠し、計測値の傾向は前川氏の法量推移に従った。近世のSK01・10や試料として個体数の少ないものや共伴遺物が明らかでない造構は除いた。

博多67次出土土師器計測表

(単位=cm)

造構	器種	口 径			器 高			底 径			底部の調査	個体数
		最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値		
SK01	小皿a	6.3	7.2	8.1	1.1	1.2	1.3	4.6	5.3	6.0	糸切り	2
03	小皿a	7.5	8.05	8.6	1.2	1.45	1.65	5.3	5.6	5.9	#	2
	坏 a	—	—	—	—	—	—	8.4	—	—	#	1
(縦り方)	小皿a	—	—	—	—	—	—	—	—	—	#	1
	坏 a	(12.0)	14.3	18.1	2.25	2.88	3.6	8.3	10.43	13.9	#	3
(井筒内)	小皿a	8.7	8.94	9.3	1.1	1.38	1.65	5.9	6.73	7.1	#	10
	坏 a	13.3	14.15	15.0	2.7	2.75	(2.8)	8.2	10.1	12.0	#	2
06	小皿a	7.4	7.8	8.1	1.25	1.3	1.35	5.4	5.45	5.5	#	2
	坏 a	—	—	—	—	—	—	—	—	—	#	1
07	坏 a	12.5	12.6	12.7	2.6	2.63	2.65	8.0	8.45	8.9	#	2
	小皿a	7.4	7.8	8.2	0.9	1.15	1.4	5.3	5.48	5.7	#	1
08	坏 a	(10.65)	—	—	—	2.6	—	(8.2)	—	—	#	2
	坏 a	14.6	14.78	14.95	3.55	3.73	3.9	—	—	—	? (丸底)	2
10	小皿a	6.9	8.06	8.95	0.9	1.32	1.6	5.2	6.2	7.3	糸切り	15
11	小皿a	7.65	10.73	13.8	1.65	2.28	2.9	5.4	—	—	#	2
12	坏 a	(11.8)	—	—	(2.95)	—	—	8.4	—	—	糸切り	1
14	小皿a	9.1	9.77	(11.0)	1.2	1.45	(1.7)	5.4	6.37	7.3	ヘラ切り	3
16	小皿a	(8.0)	8.2	(8.4)	1.3	1.45	1.6	—	—	—	糸切り	2
	坏 a	(11.1)	—	—	—	2.2	—	—	6.9	—	#	1
17	小皿a	—	—	—	—	—	—	—	6.0	—	#	1
	坏 a	12.6	12.7	12.9	2.65	2.7	2.7	7.9	8.6	9.2	#	3
18	小皿a	8.75	9.6	(9.4)	0.85	1.1	1.4	7.1	7.7	8.0	#	3
	皿 a	(10.95)	11.0	(11.0)	1.1	1.35	1.6	8.6	8.75	8.9	ヘラ、糸	2
19	小皿a	—	—	—	—	—	—	—	4.7	—	ヘラ切り	1
	丸底の坏 a	—	13.6	—	—	3.2	—	—	—	—	#	1
20	坏 a	(11.9)	12.13	12.35	2.45	2.73	3.0	7.8	8.3	8.8	糸切り	2
21	坏 a	11.7	11.75	11.8	2.55	2.8	3.05	7.2	7.9	8.6	#	2
SK01 (縦り方)	坏 a	—	—	—	—	—	—	—	7.7	—	#	1
	坏 a	12.2	12.5	12.6	2.5	2.7	3.0	8.3	8.6	9.2	#	3
(上面)	丸底の坏 a	14.9	15.5	16.2	2.95	3.5	3.8	—	—	—	ヘラ切り	3
	小皿a	7.55	8.2	9.2	1.1	1.4	1.7	5.6	7.1	6.3	糸切り	4
SD01 (下層)	小皿b	6.4	6.5	6.6	1.7	1.8	1.9	4.2	4.35	4.5	#	2
	小皿a	7.35	8.2	9.1	0.9	1.3	1.6	5.9	6.2	7.0	糸切り	7
	小皿b	6.45	6.9	7.35	1.85	2.0	2.1	4.5	4.75	5.0	#	2
	坏 a	10.8	12.1	12.8	2.55	2.7	2.9	8.3	8.7	9.7	#	4
	坏 d	14.5	14.6	14.8	2.9	3.1	3.4	10.8	11.2	11.6	#	2

## 第3章 第67次調査

遺構	器種	II 種			器 高			底 種			底部の調整	個体数
		最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値	最小値	平均値	最大値		
(上層)	皿 a	6.3	7.5	8.15	1.06	1.5	1.95	4.8	5.5	6.3	糸切り	8
	杯 a	11.6	12.2	12.7	2.2	2.5	2.95	7.2	8.2	8.9	*	7
遺構面 (3-B)	杯 d	15.1	15.8	16.5	3.3	3.4	3.5	10.0	10.05	10.1	*	2
	杯 a	(13.5)			(2.25)			(9.1)			ヘラ切り	1
(6-7-B-C)	皿 a	7.4	8.24	8.95	1.15	13.21	1.5	5.3	5.89	(7.2)	ヘラ、糸	7
	杯 a	11.6	12.3	(13.1)	2.65	2.76	3.0	(7.8)	8.55	(9.7)	糸切り	4
	杯 d	(14.95)			2.65			9.7			*	1

SK05の井筒内出土の土師器は、皿・杯ともII-1付近で12世紀後半に比定される。共伴する白磁碗、盤については11世紀後半に現れるタイプであり、青磁碗を全く含んでいない。

SK14は、ヘラ切底の土師器が出土した。共伴する磁灶窯系の四耳壺や白磁碗の型式など11世紀中頃から後半に比定される。

SK17は、白磁碗を主体とするが、青磁碗も伴っている。土師皿、杯は少量であるが、13世紀後半に比定される組成である。

SK19は、少量であるがヘラ切り底の皿と杯を伴っている。皿は、前川分類に適合する法量ではない。白磁を主体としているが、同安窯系の碗が伴っており、遺構切合時に混入した可能性がある。

SX01は、白磁碗や盤を主体としているが、土師皿は糸切り底II-4(13世紀後半)を伴っている。切合としては、13世紀後半に比定されるSK17に切られることから、もう少し引き上げるべきかもしれない。

SD01は、下層と上層で、極端な時期差を認めることはできない。焼土層を混入した上層から殆ど遺物が出土していないことから、埋められた時期は、14世紀前葉と考えられる。これは双魚文の青磁碗によっても補強される。掘削の時期は、SK20との切合にこだわれば13世紀後半以降となる。

以上手短かであるが67次調査の主要遺構の時期について記した。土師皿の分類に適合するものばかりではなく、切合関係も含めて検討を深めねばならない。諸氏の教示ならびに御叱正を請うものである。今報告の文責は、遺構については常松、遺物については古川が主体となって行った。陶磁器の分類は博多出土貿易陶磁分類表にならった。

(4)

## 註

- (1)山本信夫「太宰府条坊跡II」「太宰府市の文化財」第7集、太宰府市教育委員会、1983年。
- (2)前川威洋「福岡南バイパス開通延滞文化財調査報告第8集(下)」福岡県教育委員会、1978年。
- (3)龜井明治「電車・上原児村窯跡出土の青磁—その創年の組替え—」『専修大学人文科学研究所季報』第14号、1991年。
- (4)森木耕子「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道開通文化財調査報告IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊、福岡市教育委員会、1984年。

# 図 版



調查区南側作業風景（西から）



調査区南側造構完成状況（西から）

PL. 2



調査区南側遺構完掘状況  
(東から)



調査区東側遺構完掘状況  
(南から)

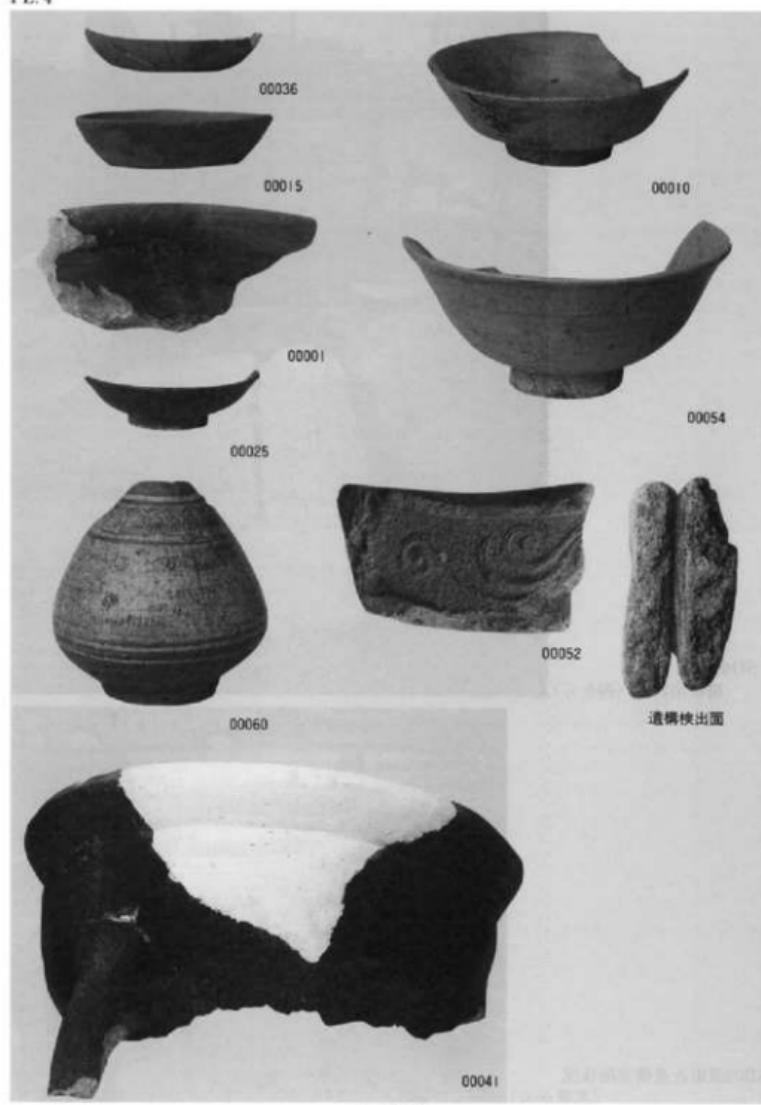


SD01・02  
溝検出状況（西から）



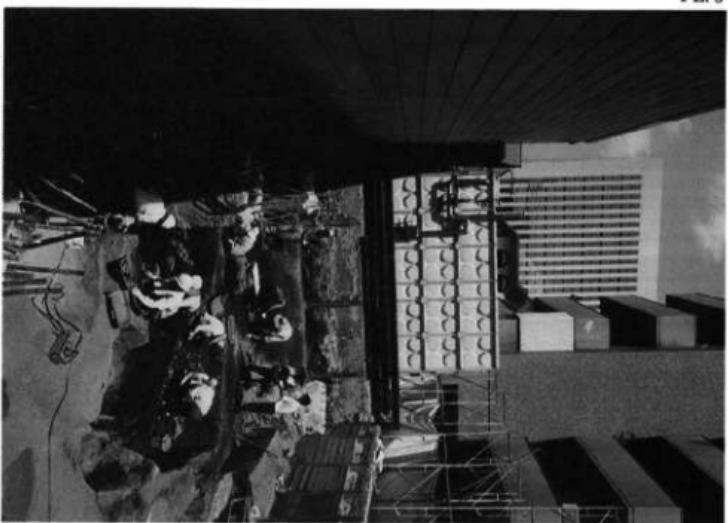
SD03溝附近遺構完掘状況  
(北東から)

PL. 4

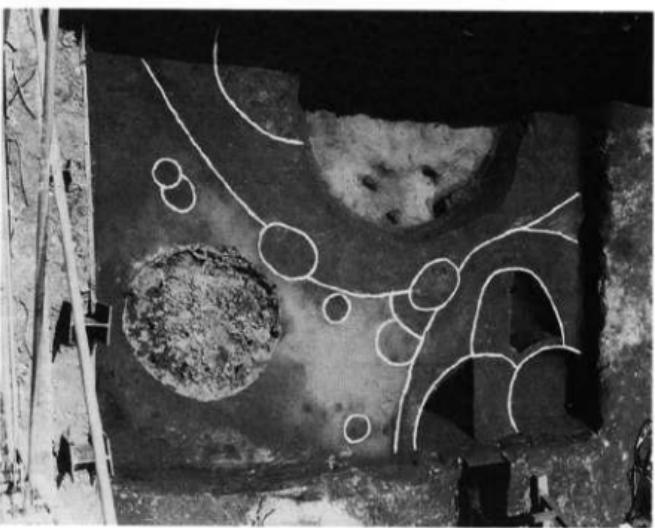


出土遺物

1. 第67次調查燒掘作業風景



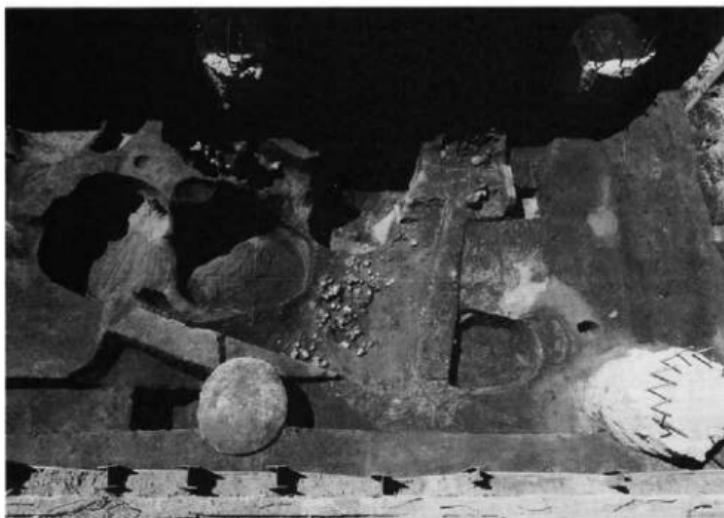
2. 南側調查區遺模檢出狀況



PL. 6



1. 第67次調査区上面全景(東より)



2. 第67次調査区下面全景(東より)



Fig.33- 3

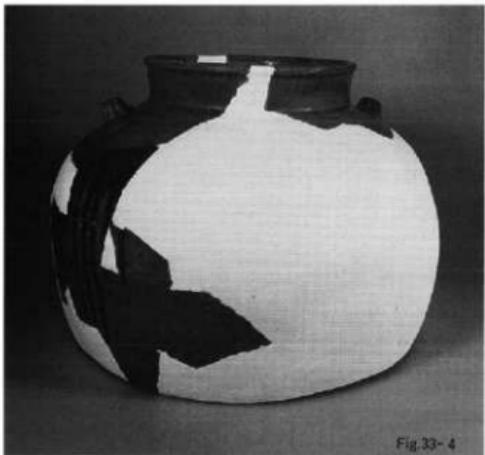


Fig.33- 4



Fig.38- 5



Fig.43- 6



Fig.45- 7



Fig.45- 8

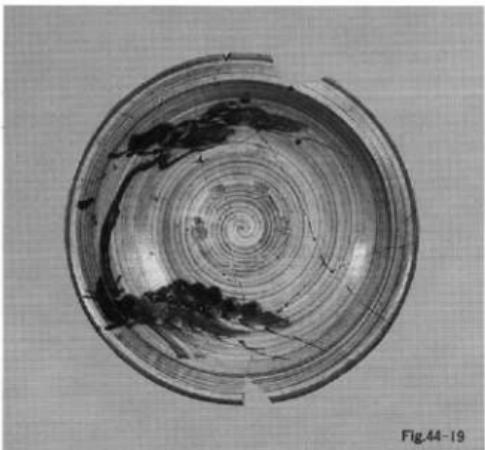


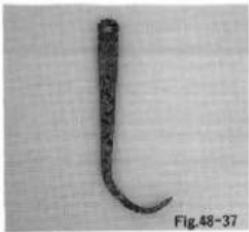
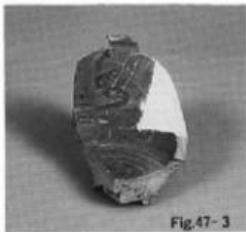
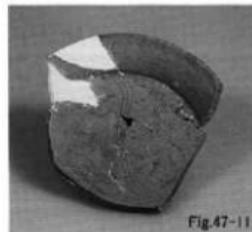
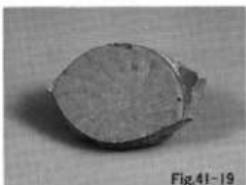
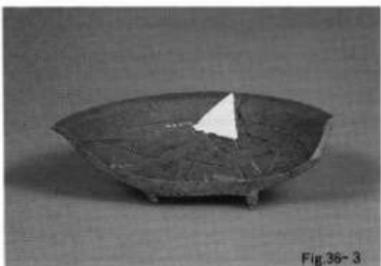
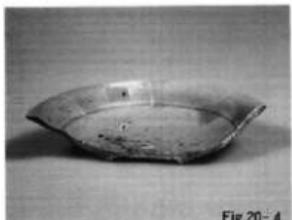
Fig.44- 19



Fig.47- 6

第67次調査出土遺物<1>

PL. 8



第67次調査出土遺物(2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第284集

博多 29

1992年3月13日

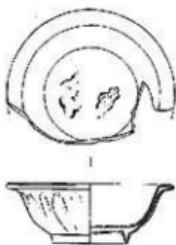
発行 福岡市教育委員会

(福岡市中央区天神1丁目8番1号)

印刷 アド印刷株式会社

(福岡市博多区博多駅南5丁目20番30号)

The general report on the 53rd. and 67th survey of Hakata Sites



1992 Mar.

by

Fukuoka City Board of Education